

橋と壁とをめぐって

あらたなる
欧亜学術交流をめざす

中国大陸移動学会始末

稲賀繁美

はじめに

シルクロードを経巡って、欧州とアジアとの文化交流を検討し、万里の長城に立って文化間の壁について省察しよう、というなによりやらずいふと豪勢かつ脳天気な企画に、深い疑いも抱かずに参加した。講演旅行と移動学会と学術国際提携のための外交交渉と、さらには物見遊山までも合体させようという欲張った設定のもと、異文化に晒されたヨーロッパ一級の知識人たちの行動様式を、四六時中付き合っ、親しく分析させていただく、という余禄ま

であった。「普通の探求における誤解」という大それた表題の移動セミナーは、Transsilk 財団の呼びかけに、広東の中山大学、北京大学、マカオ大学が協賛したもので、ユネスコ、在中イタリヤ大使館、フランス大使館さらにはマカオ政府などの後援を得て、今回ようやく実現した。

会期は一九九三年六月三日から三週間。香港を振り出しに西安、蘭州から陸路西域に入り、シルク・ロードを巡りウルムチまで。東西交渉の歴史的舞台を巡っては、史跡を歌枕として研究

発表を重ね、意見を闘わす移動学会。さらには北京とマカオでの連続公開講演会。そして、欧州共同体とも連動した「壁のない大学」と称する多国間、脱領域の大学間交流網の確立と、文明相互の理解と誤解とを解析する五ヶ年計画共同研究プロジェクトの提唱——以上が今回の会合の概略である。

団長にはウンベルト・エーコ、随員のなかにはジャック・ル・ゴフ。という、ジャン・ジャック・アノー監督の映画『薔薇の名』の原作者と時代考証責任者が並んだ格好だ。さらにプリ

ストン大学教授でジャーナリストとしても高名な、合衆国フィアット社長フリオ・コロンボといったあたりが、いわば外向きの看板役。夫婦同伴が多いヨーロッパ側は総勢一三名、それに加えて中山大学からは六名、さらに日本人一名という混成部隊からなる旅団。これに北京、マカオでの会議参加者も加えれば、今回の旅行だけで、ずいぶん多くの第一線の学者、そして中国の若手有望株たちが互いに交流をもった勘定になる。

参加したのはいずれも専門領域を共



マイクロバスに館詰めの一行。
[中央やや左後方の黒縁メガネの男性が
著者の稲賀氏（編集部・注）]

有せず、また文化的背景をも異にする研究者たちである。これが通常の学会であれば、まず専門言語と専門領域を共有することが参加の前提となるはずなのに、今回は全員の共有する作業言語さえ確保されていないのだから、無茶といえは無茶な話。能率一点張りの見方からすればこれほど不真面目で意図不明な学会もあるまい。だがこうした一見無軌道な設定は、実は明確な目論みのもとに仕込まれた、一種の起爆装置だった。

参加者全員があらかじめ共有する言語と遊戲の規則に沿い、波乱もなく進行することが当然とされる専門家同士の会議は、土俵の設定そのものを巡る議論を最初から回避している。だがそのため、いわば内輪の情報交換に終始し、かえって異なる領域間の意思疎通の壁を厚くしてきたことも否定できない。また文化的背景の差を捨象することではじめて保証されるような専門的な科学性が、普遍的成果を求めるあまり、かえって現実から浮き上がった抽象論に逃避する場合も少なくない。さらには、それぞれの文化圏での学問の伝統が厚み増すにつれて、却ってお互いに会話不可能となる傾向すらある。

一例をあげれば、日本学の現状にた

いる最近の反省がある。アメリカ合衆国の若手は、自国に蓄積された業績の消化とみずからの業績作りとに追われて、日本の学会に貢献する必要などもとよりほとんど感じていない。一方従来までの日本の国語国文学や歴史学は、外国にたいして殻を閉じ、国内でしか通用しない訓古学的文献学に耽つてきた。欧米学会にたいする劣等感の埋め合わせゆえか、ともすれば、日本のことはけつつきよく日本人にしかられない、といった閉鎖的認識へと逃避する。これとは正反對なのがフランスの一部のまじめな実証主義的研究者たちの場合だろう。かれらは日本研究に日本人さえないければ、どんなに自分たちの研究は進捗するだろうかと嘆く。日本は東洋学の素材さえ提供してくれればよい。料理——つまりそれを学問的業績へと鋳造す作業——はあくまで自分たちヨーロッパ人の役割だ、というわけだ。北米のさる大学でナボコフを教授に招く話がちあがった折りに、かれは小説家だが小説研究者ではない。象の研究をするのにいったい誰が象を先生として招くかね、と言った某教授（かれも亡命大物知識人のひとりだが）の感覚である。

こうした擦れ違いや没交渉は、今日

学問の専門深化とともにますます克服が困難となってきた。外国人研究者は宗主国の学問的仕来りに染まることをもって国際的認知と取り違えるか、さもなければ自国における外国研究の独自性に内没するかの二者択一に陥りがちだ。そのうちどちらが主導権を握るかは、もはや政治的な力関係。ただの覇権争いに過ぎなくなる。そうしたふたつの土俵を又にかけて活躍できるだけの力量の持ち主は、それなりに認知されれば国際シンポジウムなどにもお声が掛かる。だがこうした機会はともすれば儀礼的な手打ち式に終始して、とても双方の学問土壌の差異をじつくりと見つめあつて、徹底的に討論しあうだけの余裕はない。

「普遍性を求めるなかでの誤解」という、今回の会合の主旨にも、ひとつにはこうした普遍的認識と文化的差異とのあいだの矛盾への反省が込められている。共通の土俵を設定するための作業部会を、縁の下の力もちに任すことなく、参加者みずからが一から手弁当、手作りでお膳立てしてみよう。そのためにはとにかく一緒に三週間、腹を割って本音を晒しあうのが、一見迂遠なようで、実は一番大切なこととなるだろう。そうした舞台裏での蹟きや

真話のほうが、表むきの「学会」そのものの「無難な」進行よりも、おもしろく貴重なはずだ。そうした意図をも込めて企画された会合に参加したひとりとして、いわゆる公式の学会記録とは別に、公式記録からは抹殺されてしまいうでもあろうような道中で騒動、意見交換の現場で発生した事態を、速記録しながらにできるだけ生なかたで記録しておくのも無駄ではなからう。以下に提供するものは、ひとりの参加者がこうした環境のなかで、はなはだ主観的かつ不完全ながら、その能力の範囲でなんとか残し得た記録である。

*

93/6/3

二時五五分、
香港着。小雨模様。出発前々日の入ったファックスで指定されたいた湾仔の湾景国際賓館にタクシード乗り付けるが、例によって受付では同宿のはずの誰も予約が入っていない。そもそも誰の名前で予約を入れたかが不明では確かめようもない。とりあえず客室を確保してからフランス領事館や香港中国大学の関係者に電話するが、ほかの参加者たちの到着時刻が分らず、本日のレセプションの計画は取り消しの見込み、との

返事。もう慣れたのだが、いやはやこれでは遊びに外出することもままならぬ。しかたなく西安での発表「外的文化要素の受容とアイデンティティとの関係—日本美術における空間表現の場合」の準備。十四階から曇天の海峡をゆきかう船を見下ろすうちに、外はやがて土砂降りとなり、沛然たる夕闇のなかに眼下の香港は消えてゆく。

四時すぎ。ようやく到着したアラン・ル・ビション Alain Le Breton 氏より電話連絡。六時、ロビーに集合とのこと。連絡不行き届きのため、対岸のベニンシユラ・ホテルに投宿となったウンベルト・エーロ Umberto Eco 夫妻をはじめとするヨーロッパ側参加者がようやく到着し、挨拶。本日の予定については、領事館とバリの間に誤解あった由、異文化交流における誤解以前の問題である。大雷雨下の外出を見合わせ、ホテルで質素な（というよりほとんど犯罪的な）食事。ついで、たまたま酔った地元のお客が大声で怒鳴りあっている喫茶室にて、顔合わせと旅程打ち合わせの会合。そのうち数人は場所を移して三代会。会場は、巨大な大理石円柱の林立する玄関を誇る君悦酒店の、港の夜景を見下ろす豪壮このうえない大天井のロビー（支払いはずべ

て領事館のツケ。香港フランス領事館の若い文化アタッシェ Joel Thoreau 同行の写真家 Jean Louis Landeau、ル・ビション氏を交え、香港、日本そして東アジアの将来を論じ込むうちに、いつしか礼儀正しいボーイから看板を告げられる。外は雨も上がり、人通りもまばらになった超高層ビルの谷間では、亜熱帯特有の重く湿った風が肌に纏わりつく。

6/4

ヨーロッパからの参加者の行動。ホテルの周囲を歩きまわったのだが、湾仔の徹底した再開発ぶりに驚嘆する。横浜駅周辺や池袋の再開発とは到底比較にならない巨大な未来都市空間である。中途半端な日程となった裏には、午前十時発とかという存在しない列車を予約していた香港側の「自分では知らないうちに責任者にされていた」人物の手違いもあったらしい。昨日香港中国大学で予定されていた会合が流れた、という事情に加えて、そもそも広東側は当初三日に設定していたレセプションを急遽四日正午に変更のうえ、政府要人なども招いていたらしく、これが再度予定変更となつて、

日程はまたしても初端から大混乱。二時二分発の国際列車九二二号にて広東に向かう。さっそく手荷物預け入れて勝手がわからず一騒動。出発直前まで行方不明者がでるなど、終始波乱ぶくみ。なんとか全員発車に間に合う（どうせ通関が終わるまで列車は発車しないのだが。それやこれやで結局朝食のみならず昼食も食べそこなうが、時差のせいか欧州からの参加者から文句の出なかったのが不幸中の幸い。腹は減つても、とは参らぬもので、形而下の要求を満たさずしては、この種の形而上学的企画は、けつして成功を収め得ない宿命なのだ。

一四時四六分、広東到着。ポロニヤ留学組の王賓は、広東中山大学の一行が税関の向うで迎えてくれ、久闊を叙す。予約してあったバスでただちに市内で古参の大ホテルのひとつ東方賓館に入る（ここまでは一転してすこぶる能率がよくなったのだが。ソ連時代の雰囲気が残る一辺内徑で百メートルほどの口の字型の大建築で、その中央には広大な中国式庭園が広がる。ところがこの大建築、五十メートル級の廊下を何度か折れ曲がってはじめて客室にたどり着くという調子で、あまりに大きすぎる。そのくせ相客の

部屋番号は互いに連絡不行き届きだから電話連絡網は満足に働かない。集合場所に現れない参加者を探しにゆくと、まずはミイラ取りがミイラになる仕組みで、捜索隊に二次災害も発生する。いやはや時間ロスの総和がバカにならない仕組みだ。

かくして、六時間遅延した中山大学の公式レセプションに出席すべく、バスでいざホテル出発となったところには、運転手さんの予告したとおり悪名高い広州の夕方のラッシュに巻き込まれ、にっちもさっちも行かなくなった。運転手さんの機転で、普段はバスの通らない裏通りの珠江沿いの泥べちや道を揺られながら大学構内に入る。時計を見ると、予定をさらに一時間遅れた午後七時。すでにあたりは暗すぎて記念撮影もまふまふと失敗。とにかく新しく建設されたこのまた巨大な白亜の講堂の儀式用正面階段を昇り詰め、これまた久方ぶりの関係者一同に迎えられ、さっそく貴賓室で初会合。中国側参加者と初顔合わせ。親しい顔。未知の顔あい半ばである。

全体の基調演説も兼ねて、ウンベル・エーコがかつての学生であった王賓 Wang Bin のボローニヤ体験を枕に即興で一席。イタリア人から「そのうち

遊びにおいで」と言われたのを額面通

りの「招待」と受け取ってのこの出掛けた王賓は、それが内実の伴わないただの挨拶であることを知って、最初には裏切られ、騙されたと感じたようだが、ほどなくこうしたイタリア流を理解したようだ。たが、その王賓に今中国に「遊びにおいで」と招かれた我らの運命やいかに、うんぬんというウイットに富んだスビーチに、一座の雰囲気もぐっと和む。イタリア人はあくまでイタリア流に招くのが正しい異文化理解なのかもしれないが、しかしこれではイタリア体験の復習といわんか復讐といわんか。招かれたイタリア人こそいい面の皮。対するに中国流の熱烈歓迎を押し通すことは、イタリア人に対する理解の欠如と自文化の押し付けにもなりかねない。そのどちらがあるべき理解なのか、避けるべき誤解なのか。これは難問であり、我々の会合の主題に付きまとう永遠の課題でもある。ひとは異文化を理解できる程度には誤解することができ、マルコ・ポーロの時代から今日に至るまで、相手に合わせつつも相手に染まらないこうした微妙なマージンは、必ずしも正面から論ぜられることなく、もっぱら実践的

実際のやり過ごされるか、マニエ

ルを作ることで、突き詰める事なく回避されてきた。外交交渉が成功するためには一方の手の内はかえって他方に悟れる方にはならなかったし、わざと相手方の出方に理解を示さない態度がかえって一貫性として評価され、相手への慮りが逆にのりくらりの不誠実と解釈されるも。日本人の「気配り」がかえって「不定見」と「誤解」(?)される所以でもある。こうした虚々実々のやり取りがこれから三週間の我々の学会の水面下で進行し、公式行事のいわば裏地模様をなすことだろう。中山大学ご自慢の紫荊園での晩餐会は、質素な室内にとっておきの料理の取り合わせ。隣の席は左にジャック・ル・ゴフ夫妻、右に姜伯勳 Jang Bo-hung 教授。姜先生はちゃんとル・ゴフの中国語訳の「新しい歴史学に向けて」を読んだる勉強家で、五十歳すぎで始められた日本語にも熱意がある。そんなわけでル・ゴフ夫妻と姜先生との会話の通訳は小生の役割となった。そういううちに、土地柄にもなくベキン・ダックが出て来る。お国自慢にしては妙な話で、味には堪能しつつ訝しがった。後にして考えれば、どうやらこれは、この旅程の後半のホストとな

る北京大学への対抗意識の現れだったらしい。ホテル帰着途中から、レナータ・エーコ夫人が夕食にでた豆料理にうっかり気付かず、思わぬアレルギー症状を発するハプニング。幸い入院沙汰には至らず、この一件でかえって一向に連帯感が生まれた。

6/5

起床するとなんとすでに八時。ホテル出発の時刻ではないか。すわ遅刻とばかりにおお慌てで長大な廊下を走りぬけロビーに駆け降りるが、あたりは閑散としていて、お仲間もまだ集まらずにすらいな風情。まさか定刻出発のはずはないのだが、と時計を見てようやく気がついた。日本時間を一時間遅らせるのを忘れていたのだ。ロシア式のばかでないロビーわきのホールで、あらためてゆつり朝食がてら、三々五々あらわれる参加者たちと情報交換や予定の調整。ベキンからマカオへの航空券が手配されていないことが判明して大騒ぎ。到着側と出発側それぞれが相手サイドで手配したものとばかり思い込んでいたのだ。そのうち今度は広東の交通事情を知らぬ一部の参加者から、出発を九時に改めよ、との意見が出て、ひと悶着の末、

中国側が妥協。大雨のなかを出発するが、ために、予定どおり大渋滞に巻き込まれる。バスに乗ってから渡された手書きコピーの日程表によって、本日の予定がようやく分かってくる。こうした形而下の舞台裏は、本来なら筆をはしるべき部分でもあるが、ここに中国側の苦心もあり、また実際には精力の大半をこれで殺がれてしまうのだから、これを無視しては、報告そのものがかえって偽りの奇麗事だけに偏り、歪んでしまうだろう。

本日の目的地は、阿片戦争の舞台となった虎門 (Humen) の要塞。所要時間片道四時間。その見学を主眼として、途中、広州とマカオとの中継地として目下大発展中の無名都市を表慶訪問。一九八八年になって突如「都市」の認定を受け、現在では一三七万人を越える人口を擁する大都市へと変貌した东莞 (Dongguan) の町である。その発展の様子を紹介する博物館への訪問を地元のガイドが旅程に組み込んでくれたのはよいが、ご老体を含む我々一行がようやく汗水たらしめて三階まで階段を昇ったところで (もちろんエレヴェイターなどない) 冷房による電気容量オーバーのためか、突如停電。まっ暗闇の展示場を一巡しただけで、見学中止

のまま退出。お生憎様。つづいておきまりの「一般市民」宅訪問。これがあらかじめの予告などなしの、演出ぬきのぶっつけ本番出でこの勝負。右往左往の末とある一家に突如闖入。お騒がせ様。昼食に招かれた市庁舎では市長から直々、めったやたらに数字を羅列した宣伝を、(それは格調ある普通話で) 拝聴する。なんといつても数字のうえではかの経済特区の代表、深圳よりもすべてにおいて东莞のほうが秀でているというのが、ご自慢なのだ。

虎門の要塞跡への道のりは、おからの雨に加えて目下道路が工事中という事情もあり、しばしば座席から転げ落ちるたいへんな悪路の行軍となる。最近人民の英雄として再評価されている林則徐 (Lin Zexu) の英断を称える教育的歴史史跡かつ観光名所とするため、途中の道路が改修中だったのである。こう交通の便が悪くては、弾薬の補給もままならず、英国海軍を迎え撃つのも容易ではなかったらう、と想像される。中国映画「阿片戦争」には、中国側の大砲の射程があまりに貧弱で、閩兵して啞然とする林の姿があったが、その場面に比べればこの砲台跡は見かけただけはるかに立派である。海岸に沿って幅二百メートルにも及び

高さ三メートルほどの二重の石造りの堅固な要塞が続く。たしかに湾口の要所だが、対岸は霧に霞む遠かな距離だし、高台がなく、銃口の標高が極端に低いのが気になった。高温多湿の現場はセミしぐれ。エコーがしばらくセミの合唱の指揮をして見せ、終わりに手をポンと打つと、みごとにセミは鳴き止んで、一同ヤンヤの喝采となる。

东莞市にもどる市議会庁舎の来賓室で会合 (冷房完備!)。蔡鴻生 (Cai Hongsheng) 教授が「ふたつの西地 Ouchang」と題して、中国にとっては古

来からの西域 Ouchang と、十四世紀以降、南方から伝わった西洋 Ouchang とが二重の「西」世界観を形成してきたことを文化史の立場から検証した。「洋」の概念が「洋人」「洋教」(キリスト教)「洋樓」(日本語ならば洋風建築)「洋服」(日本語なら「洋食」)とヨーロッパ一般を指すものになり、アヘンも「洋薬」として薬の一種と見なされ、これが「土」つまり土着のものと対をなしていたことが紹介された。一見なんでもないことのように見えて、この「西洋」概念の二重性は、いまだに自分を「東洋」とは認めたがらない「中」つ国の世界認識を確認する出発点として大切である。

市庁舎で夕食だが、カニや鮎魚もふんだんな御馳走に中国側は氣勢があるが、ヨーロッパ勢はさすがにいささか食傷きみ。手を油まみれにして香ばしいカニを平らげ続ける小生は、「日本人離れている」と顰蹙を買ったというか、ひたすら呆れられたというべきか。

珠江をフェリーで渡るという珍しい経験もしたあと、ようやく深夜ホテルに戻りつき、翌日の予定を協議。自由行動でどうしても清平の市場見学したいと主張する幼児性のお客側と、広州の交通事情から遅刻者の出現や飛行機の搭乗時刻を心配するホスト側が対立。一同散会ののち、明日の日程再設定のため王賓と奔走。ついでアラン・ル・ビシヨン氏を交えて、パリとの緊急連絡 (同行予定のヴィデオ撮影隊がヴィザ、撮影許可のトラブルで参加困難になっていた。その他財政案件の処理に追われ、談じ込むうちに明け方になっていった。

9/6

早朝八時四五分からホテルで討論。昨日の討論 (中国のヨーロッパ観) を受けて、胡守為 (Hu Shouwei) 教授の司会のもと、ヨーロッパの中国観を検討。発題はル・グ

「Japan」の教授。ヨーロッパのひとびとが「東」にたいして抱いたイマジネールのありようを総括した展望だが、フランス人の内輪向しか通用しないバーフォーマンスとは違っており、あくまで学術的隠語を排除した、外向きの平易かつ明快な整理に改めて感心する。彌永信美氏の名著『幻想の東洋』をもつ我々としては、その要旨をここに繰り返すまでもあるまい。また筆者自身、昨年の比較文明学会のシンポジウムで、中国、ロシア、イスラーム、日本それぞれにおける東西観の比較、という企画に参画した経緯もあり、『比較文明』八号、一九九二参照、質疑の最後に発言を求めた。つまり、(一)ル・ゴフ教授はヨーロッパの「中国観」というよりむしろ「東方観」を述べたが、昨日の蔡老師の話にもあったように中国人にとって「東洋」に該当するのは日本でしかなかったこと。(二)また教授は地上楽園と東方とのダブル・イメージに言及されたが、これがエドガール・キネーの「L'Orient propose l'Occident dispose」という「クリストを遊びて」をもじった警句に代表される世界観であるとともに、そうした対比でキネーが指した「東方」とは、民主国家たる西欧とオリエント的専制というヘーゲル的な歴史の弁証

法のかたにある、いわば無時間で悠久で超歴史的な「東方」であったこと。(三)そしてその究極の東方(マルコ・ポーロの黄金の国ジバング)たる日本にキリスト教の真理の証しを見た、アンチ・クリストの星たるギョーム・ボステルのことが言及されてしかるべきこと。(四)さらに中国にも同様の東方幻想があつて、秦の始皇帝が派遣したとされる徐福(Xu Fu)の来訪の地と称する場所が、新宮はじめ日本各地に点在すること。最後(五)に日本の補陀落信仰をも考慮に入れば、一種の東方幻想が西欧、中国、日本と三重の入れ子細工になって存在していることを、「三重大学教員として」確認した。そういえば、ティム・セペリン氏の徐福号による太平洋横断実験航海は、いわばこうした人類の東方幻想の集約でもあったわけだ。

はからずもこの言及が、この学会への唯一の日本人参加者の中・欧どちらともつかぬ中途半端な位置を象徴してしまつた。一方でボステルの名にはエーコが「プラボー」を発して応援してくれたものの中国側はきよんとするばかりだし、反対に中国側は徐福伝説にうなづくのだが、これにはヨーロッパ側からはとんと反応がない。両者の常識の隙間を埋めるのがどうやらこの学会を通じて唯一のヌエ的存在たる、雑種文化の教育を受けて来た人間の務めとなりそうだが、いやはややつかいな仕事になりそうだし、とこの瞬間悟られた。

光孝寺、清平市場、陳氏書院、六榕寺と、時間がないにしては能率よく観光コースをこなしたあと、夕刻、白雲空港(飛機)から西安へ飛ぶ。空港二階レストランのせつかくの美味な食事(もそこそこ)、こたがえすロビーを通過して通関してみると、例によって出発時刻が遅延して、二時間近く待ち合(い)室に缶詰の待ちぼうけ。食いしんばう後悔先に立たず。メモ帳の記録によると、通訳の一人で歴史学碩士、ジュネーヴ大学留学の経験もあり、Edgar Bonjour, *La Neutralité suisse* [埃德加・蓬儒「瑞士中立史」]武漢大学出版社、一九九二の訳者でもある劉文立(Jin Wenli)副教授と、しきりにエドワード・サイードの『オリエンタリズム』、ポール・コーエンの『知の帝国主義』などについて議論していたらしいが、それが運香楼での昼食の折りだったか否か、もはやまったく記憶にない。疲勞。西安入りは深夜となる。

日光も眩しい快晴のなか、大慈恩寺

大雁塔で玄奘の仏典将来と翻訳事業とを偲び、なんとかの高昇りをやって全員集合時間に遅刻して小李のお目玉を頂戴し、碑林では、メシアを彌施訶と仏教用語をも援用しながら音訳している「大秦景教流行中国碑」解説と解説に小一時間を費やす。専門の歴史家胡守為、姜伯勤助教に、中世史家ル・ゴフにエロコ、通訳はイエズス会士で第一級の中国語通訳 Donique Thyte となれば、たった一枚のガラス越しの碑文の前に、議論は尽きない。あまりに専門的な議論について行けず、ふと斜め向いに目をやると、なんとそこに「唐広智三藏碑」(徐浩筆)があるではないか。当方は空海について言及する予定でもあったので、かれの師匠恵果のそのまた師の業績を顕揚するこの碑文にも興味があったのだが、一同の興味をひこうにも、いかんせん多勢に無勢。書に関心のある日本人観光客ならいざ知らなく、こんなところで立ち止まらざる動かなくなる妙な西洋人のお客様一行に、ガイドの小李、普段とは少々勝手が違つて、いささか手持ち無沙汰な様子。

観光ずししてあまり好感のもてない Tang Dynasty (要するに巨大なミニュージック・ホールを昼間はヴァイキング・

レストランにしている)での食事もそこで、午後は化覺巷清真寺を訪問。現在の市街中心のロータリーとなっている鐘樓わきから、これも唐代の栄華を忍ばせる巨大な鼓樓をくぐると、あたりは一転回族の土産物商店街がアーケードをなす。その奥に安らっている中国風のイスラーム寺院は、七四二年の創建。その会議室を借り、バオロ・ファッピ Paolo Fabi, パリ・イタリア文化会館長司会で、三回目の会合。天井の扇風機が回り始めると、空気が乾燥しているためか、西安特有の暑さもかえって心地よい。議題は「昨日虎門でフリオ・コロンボ Frio Colombo が行った、現代における情報の変貌に関する報告を受けての質疑応答」という建前だったが、コロンボ教授に補足を願ったところ、これが昨日の蔡老師の発言を受けた「第三の Occident」なる概念を提唱する小一時間の大作演説。当方はあらかじめコメントを求められていたため、その場での調整に四苦八苦。以下、幸い聴衆が爆笑してくれたので助かったが、おそらく禅問答に近かったはずの小生の答弁を復元してみる。

——コロンボ教授は national interest がもはや明確でなく、また政府・国民という単位を飛び越えた政治的な mental

local interest の表明も実際にはその七五パーセントがニューヨークの英語メディアによって独占的に生産されているという現状の延長に、transnational interest が台頭してきた趨勢を「第三の西欧」として把握し、その borderlessness 世界——古典的な国際紛争の彼方で確保されるメデアティックな水準での平衡と参加者の相互尊重の環境——における特権的な話題として、‘immigration’ of ‘environment’ health (例えば AIDS) および environment の四つを強調された。だが、まさにこの四つの論点こそ、コロンボ教授が楽天的に主張するのは逆に、むしろ今日メディアそのものが己の内部に取り込んでしまった病ではないか。例えば、国際捕鯨問題についていえば、これはありもしない政治的対立をメディアが演出して捏造し増幅して解決不可能な紛糾をもたらししたもの、と理解もある。Le dialogue mécanisé peut empêcher le dialogue immédiat という危険だ。

そもそもエロコ教授が初日に表明した、双方の差異を理解しようとする「交差する眼差し」 regards croisés といった bilateral な communication なり dialogue への成立の可能性こそ、疑問視されるべきである。例のナボコフの教授採用

を拒絶しようとした排斥の論理(象に象とは何なのかを尋ねる人はいまい)こそ、今日アメリカ合衆国のメディアを覆っている political correctness なる偽善的な倫理綱領と通底する「暴力排除の暴力」ではないか。自分に都合のよい論理や倫理の土俵へと認識対象を無理やり押し込む態度の暴力性こそエドワード・サイードが自らそれに感染する危険を犯しつつも「オリエンタリズム」で告発しようとした政治性ではなかったか。The Third Occident が logos の水準における東と西との橋渡しになる、などといった予定調和的な——そして危険な——お題目はむしろ破算にして、このユートピアに乗ることを拒絶する——つまりしゃべれない象の立場からする——抵抗の性質を研究するのがわれわれの使命ではないか。忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、という言葉が中国にはあるが、日采二世のアメリカ兵が沖縄戦で経験したこのアンティゴネーゴの矛盾——fidèle incommunicable et communicable infidèle との間の相克——こそ、logos と ekrinos の対立を媒介する meta なるものの中心的課題ではないか。

コロンボ教授は La Cina è vicina という映画の題目を合言葉に、significant sig-

ritteの相乗効果へと希望を託したが、この見てくれと意味との安易な癒着こそが危険なのだ。だがLudwig Bachmannの冷戦時代のヴィーノの置かれた状況を歌ったある詩の一節にある、*Amien ist Jurecht*はまさにその逆の例だろう。意味のうえではアジアは彼方と言明しながら、実は詩の音声からはアジアの大地が自分の呼吸のなかにまで浸透している様が伝達されている。詩人のメッセージはまさにこの *«gentil et sage»* との裏切り、撞着、乖離のうちにこそ、凝縮して込められていたはずだ。この局面の研究こそ我々の *poétique transatlantique* の使命ではないか……。

これは蛇足だが、先頃宮澤首相の米国における労働倫理の低さうんぬんの発言がアメリカ合州国で問題視され、国際メディアでの誤訳問題へと発展したが、この騒動で(一)AP、(二)共同通信、(三)朝日新聞の三者が果たした役割はどうだったか。そこに露呈したのはまず(一)APの体現する普遍性、真実の報道なるものへの信仰と使命感の独善性、ついで(二)こうした大手国際通信の独占的ヤルタ体制への反発のあまり逆に特ダネに飛びつかざるをえぬ共同通信の体質、最後に(三)

共同配信を「誤報」の捏造と断じ、もっぱら「国益優先」を日本国内むけ専門に訴える朝日新聞の事勿れ主義的良識の押し売りと他社の揚げ足とり。国際メディアと国内メディア、そしてその仲介媒体の三社の演じたこの見事なまでの役割分担にも、フリオ・コロンボの描いた理想のメディア世界の虚構が浮き彫りにされるはずだ。

この不鮮明なコメントに対するコロンボ教授の返答は、ニューヨークのメディアに内属しながらあくまでイタリヤ人としてのアイデンティティも主張してきた外国人一流ジャーナリストによる自分の職業への信仰告白ないしは自己正当化の臭いが強く、対話は擦れ違いに終わった。とりわけ捕鯨問題はただの塩コショウにすぎない、という返答には、ニューヨークの本音を聞く思いすらした。米国でも皆が捕鯨問題に関心を抱いていると思う幻想こそ、いかに日本人が国内向けのメディアに躍らされているかの証拠だったのだ。ニューヨークで発言できればそれが何かしら地球的に普遍的な検舞台と実感され、しかもそこで通用するだけの責任感と自信とに溢れた人物から見れば、またぞろ自己主張が満足にできぬものだから退行現象を起こしてコミュニケーション

イションを拒絶しようとする禪風神秘主義好みの自閉的日本人が、下手な英語で訳の分からぬ戯言を、と取られたかも知れない。

むしろ司会のバオロが友人フリオのアメリカ普遍主義ずれに反発し、パランスさえ取ればそれで双方向的な対話が実現するというわけではなく、その影でそうした場を支えている不可視の力関係 *rapport de force* を忘れず考慮する必要があると強調しつつ、宮沢発言の分析にかかわる当方の発言に賛意を表明してくれたのが印象的だった。また、紀元一二世紀のローマ、とりわけハドリアヌス帝の折衷主義的政策やカラ帝治世下におけるローマの普遍的な市民権承認の実態に「第三の西欧」の等価物を見いだすル・ゴフも、それがいわば人工的な停止状態でしかなく、その後あまた歴史が再開(*histoire reconstruite*)した事実——つまりらぬ事実だが、と断りつつも——我々の注意を促した。

これらを受けて発言を求めたエーコは、自分の主張しなかった対話とは、相手が象なら自分もカバだ、という自覚を練ることで、それこそこの会合の目的——といったところで同じく太っちょのル・ゴフがカバとは自分のこと

かとチャチャを入れ、会場は大爆笑——、さもないと、「第三の西欧」は今度中国でも建設の予定とかいう、あの醜悪なデイズニールランド(北京に建設予定のアダム・シヤールド・ヴェンチャー記念の欧中ジョイント・ヴェンチャー見本市場会場への仄めかし)に終わってしまいうだろうと、見事なスタンドブレイ。当方にいささか好意的な、しかし当方のむなしい抵抗ぶりなど最初からお見通しのエーコの巧みな舵取で、「第三の西欧」をめぐる議論は幕となった。戸外へ出ると昼間の熱気も心なしか弱まり、西安の街が夕日に照らされて美しく映え、自転車ひとりとが長い影をひいて家路へと向っていた。

6/8

朝食の席。昨日の司会のおりに、ゲーテの自然学研究に事寄せて東西の出会いをイチョウの葉の未分化な形態のうちに認めようとしたバオロに敬意を表し、たまたま持参した出身大学の紋章の入ったネクタイ・ピンを贈呈した。われらトランスクルトゥラ財団のエンブレムにしようとかれが提案していたからで、残念ながら先例がありますよ、と指摘したまでのこと。昨夜はイタリア人ばかりの

食卓に押しかけて夕食を共にしたが、ミラーノにクーデターを計画して独立国家を樹立するだかの陰謀はそばで堂々と傍受しながら、ネイティヴの内輪の速射砲会話では半分も分らず、時々ちゃちゃを入れただけ。もともとじめにイタリア語をやったのだった、と悔やまれた。そのあと深夜に到着予定の語彙学者、ロペール辞典編集主幹アラン・レイを、王賓とバーで話しながら待つが、ついに現れず、午前二時ごろ寢室に退却。この三年間で副収入が膨大に増え、まったく外貨にも不自由になくなって札ピラを切りまくる友人の姿に、大陸人のしたたかさを感じ、いささか複雑な心境。

八時、始皇帝兵马俑坑博物館に向けて出発。この定石見物の記録は省略しよう。大学者先生といえども、こうした桁外れのものを見物するただの「死すべき定め」へと還元されてしまう。観光客の波に流されながら世界各国語で飛び交う解説を聴くでもなく耳にしていると、どうも日本人向けガイドさんたちの説明が一番水準が高いようだ。文化的教養を共有する部分が大きだけ細部の伝達が案で正確だからだろうか。途中ハブニングといえは、某夫人失踪事件ほか幾つもあつた

が、ひとつだけ。同行の写真家ジャン・ルイが、銅車馬を展示した撮影禁止箇所で警備の兵隊さんに現行犯でとつかまりながら、そこはもう職業カメラマンの慣れっこで巧妙に対応し、なぜか不思議と無罪放免になり——電話連絡をした上司がたまに不在だったのが僥倖とか、との噂だが、——件の兵隊さんご自身が上司不在にかえってやれ助かったとホッとした風情を見せたのもおかしかった。むしろ真つ青になって、ジャンルイを咎めたのは、文革以来、中国官憲の怖さを十二分に知っている涉外係の王賓のほうである。差し止められるまで優に三分間はヴィデオを回していた、というのだから、わがカメラマン君の度胸というか、プロとしての職業中毒も並大抵ではない。

昼食をはさんで午後は、これも道すがらお決まりの観光地。玄宗皇帝と楊貴妃の……であまりに有名な湯治場、華清池参り。ただし一般客と違うのは、当時あたりが休息と歌舞宴会に使った飛霜殿（むろん解放後の再建）を借り切つて、贅沢にもここでセミナーを開いたことである。冷房もないのに涼やかな帳をめぐらした亭の大観分みたいな建物で、例によつて壁に面して配置された深ぶかとしたソファに座ると、

まことに心地よくおのずと眠気に誘われるのもいたしかたない。昼食でウンベルトからやたらとビールを勧められたのが祟る。あちらこちらでお仲間がコックリコックリするのを眺めながら、胡守為教授の「長安における漢族と他者」、蔡鴻生教授の長安都市文化の機能論・構造論および姜伯勤教授の唐風俗における西域風俗の影響に関する指摘と、密度の濃い発表を聴く。あのスーフィーのジクルとの関連も想像したくなる胡旋舞をはじめとするさまざまな西域起源の事蹟を胡先生がまず披露した。石田幹之助の名著『長安の春』や、僧玄昉を主人公に、李密窮を語り手に仕立てた松本清張の歴史小説『眩人』冒頭の、目も覚めるような空中からのクローズ・アップの描写でも日本では親しまれているあの長安風物が目前に彷彿とする。また姜先生に拠れば、そもそも玄宗皇帝の温泉遊びもその文化的起源は西域より伝わった沐浴の風習にあり、当時流行のショールももちろんベルシア起源だという。蔡先生の発表には、ちょうど中世都市比較研究について編著を準備中のル・ゴフ教授が高い評価を与えて称賛したが、このあたり小生は自分自身のコメントの準備に追われ、詳細は残念ながら聞き落

とし。しかし結局時間ぎれで当方の準備は不発に終わる。以下覚え書きまでだが、ざっと列挙していたのは……(一) 中国では今日でも外国人のことを「胡族」(Hu) というが、通訳がこれを西洋語に翻訳した瞬間、中国人の外国人意識に根付いた西域起源のこの表現の語源学的特性が消滅してしまう。(二) 方角についてのコスモロジックなシンボリズムの復習、つまり東夷、西戎、南蛮、北狄の表音文字上の意味——中国のひとたちは当然と思って気にしないし、逆に西欧からの参加者はこれらを「Sindus」と訳すことで脱落する部分に気付いていない——(三) 内部と外部、中心と周縁についての人類学的コメント、万里の長城についてのオーウェン・ラティモアの指摘——つまり外に出てしまえばもう中国人ではないし、内部にいる限り中国人という意識が、中国人の宇宙観の中核をなすこと。(四) そしてル・ゴフが一般論として指摘した、伝達される文化要素と、伝達者およびその受容者を区別して研究する必要に関する具体例として、空海による密教伝来と、普遍言語の夢へと飛翔するその神秘主義的言語哲学——「法本无言非言不顯、真如絶色特色及悟」およびそのサンスクリットとの絡まり

を、近代ヨーロッパ比較言語学の沿革とからめて説明すること、などなど。ちなみにドミニックがこの空海の文句を次ぎのようにフランス語に訳してくれた:

L'essence de la loi est au delà de la parole mais seule la parole peut la manifester; la vérité est compréhensible à l'autre de la couleur qui attendrait la couleur pour entrer dans la conscience. 前半はあまりつまい訳ではないとのこと。

6/9

早朝八時三〇分より中国と西欧の科学観を対比研究するセミナー。発題はバストゥール研究所の分子生物学者 Antoine Danchin。コメントは王資。象だカバだといえ、おそろくジャック・モノーはサイドだったろうという枕から始めたアントワーヌは、つづいてトックヴィルが「アメリカにおける民主主義」のなかで中国のいわゆる「文化的停滞」に言及した文章を引用した(井伊玄太郎訳、講談社学術文庫版下巻九七頁)。原文で読めば一分とかわらないこの引用を翻訳するのにあの練達のフランス語遣い劉文立が悪戦苦闘、五分以上も費やさねばならなかったところに、ふだん見落

されている問題を感じとることとなるのはウンベルトの感覚なのだが、その問題提起との関連で、アントワーヌは

中国における「勢」(勢)の概念に注目し(これを包括的に示す西欧科学用語が見つからず、*propension*、*énergie potentielle*、*équilibre stationnaire* など *potentiel* に提案される)、それがエネルギーを潜在と潜在との両相の交換において定常(*stationnaire*)とみるところに、中国の世界モデルの非更新性を見定めた。これと対比的なモデルとしてアントワーヌの抽出するのがギリシアを代表する世界模式 *enclitique* で、これはいささか初歩的な図式だが、そこには現実とイデアとを分離し、さらに *axiome*、*théorème*、つまり定義と立証を区別する思考形態のあることを強調する(この両者の区別がまたしても中国語に翻訳できず、日本では各々「公理」と「定理」という訳を与えていることをわざわざ説明させられた)。最後に若干はしりながら結論として西欧の認識モデルは「疑い」にその基礎をもっており、西欧での認識モデルとは、あくまで現実とは距離をおいた *logos* の産物であり、同一の現実について様々なモデルが提案されては反論され拒絶されてきた (*répétitif des modèles*) のが西欧における

進歩なるものの様相だった、との提案を示した。

すでに見たように、トックヴィルの中国観がそれじたい西欧におけるふたつの世界観の複合からなっていることを見抜くのは容易かろう。既に指摘したように、西欧の中国観の一方にはヘーゲル、さらにはマルクスのアジア的生産様式の議論につらなる、歴史の外部としての停滞アジア観があり、その一方に世界の究極の真実のありかをアジアの東の果ての不易の相に探そうとする伝統がある。その両者の結合から、究極の真理の墮落した形態としての中国というトックヴィルの中国像も結果したのではないかと指摘しておいた。ダンシヤンの発表に即興でコメントを加えた王資はまず第一に訳語の問題に拘泥して、そもそも中国では *science* と *logique* の区別に相当する分類がなく、両者ひっくるめて科学(術)と見なされた、これが中国科学の遅滞の一因ではないかと主張する。

第二に世界模式に関しては、中国における一元論の伝統に言及し、気(*qi*)、エネルギー、理(*li*)、*logos* および道(*tao*)、*logos* の三者いずれにおいてもいわず *epistemology* (認識論) が *ontology* (本体論) [存在論] と癒着した一元論が展

開されているため、現実とモデルの分離はもとから想定されず、また認識理論も西欧の例えればカール・ポパー流の反証可能性の議論に結び付かず、(「*épistémologie*」) の概念が通訳の劉に分からず *fortiter* [強化] や *fausser* [歪曲] と誤訳されたりしたのだから、むべなるかな、と言わねばならぬ、それからあらぬカント流の神の存在証明といった手続きが儒教を奉ずる中国では馴染まなかったことを王資は確認した(周囲の西洋人から儒教は混乱だ、*Confucius is confused* などという不遜な軽口が飛ぶ。さらに中国人の一元思考の傾向について敷衍し、その背景として老荘思想における自然と社会の同一視、儒教による、社会秩序と個人との関係を天(親)と子の従属関係に還元する傾向、革命以来の教条的マルクス主義の影響に加えて、文化大革命によってデカルト流の「疑い」の態度そのものに疑いが差し挟まれ、結局弁証法的正反合と伝統的な中庸観との合体した *holistic* 的世界観が支配的となっており、といささか大風呂敷に結論した。

王資が中国語で発表し、しかも通訳するのがきわめて困難な議論のため、中欧双方にかなり理解の齟齬をきたした。以上の要約も王資の意図からはい

ささか逸脱しているらしい。質疑もいろいろと紛糾したが、中国では(自然)法則も(天の)法(つまり法律)にほかならず、それも我々を保護するものというよりは、一方向的に罰するためのものと、民衆からは感じられており、いかに法を逃れるかに民衆の知恵がある、といった指摘もされた。また姜教授からは「勢(勢)」の概念について、武器を取ることによって力を得る、といった語源的説明も加えられ、また昨日見学した、始皇帝陵西側から一九八〇年に発掘された馬車模型の「安車」が、いかに「礼」の規範に則った象徴体系によって構成されているか(円蓋が天を、正方形の車体が四方を、そして全体が六合(天地東南西北)を、車軸の三十本のスポークが月の運行を)という、中国のコズミックな法則理念についての、具体例に即した補足説明がなされた。

出発の時間が迫っていたが特に発言を求めた。(一)トックヴィルについては既に述べたとおりだが、(二)いわゆる中国科学の遅滞については、science and technologyの未分化というよりも、すでに「ニード」も指摘する通り、むしろ文人たる知識人官僚とそうでない工匠との間の情報断絶こそが大きな要因ではなかったか。一例として、これは美術史家エジャートンに指摘があるが、中国で翻訳出版された西欧の百科事典の図解に見られる機械の説明では、しばしば版画家がその機構を理解しないままに適当に模写したため、そこからいもはも元の機械を復元することが不可能になっている。無理解をこまかくために登場するのが曖昧模糊たる蒸気や雲、つまり例の「氣/勢」であるのも意味深長だ。(三)また王賓はもっぱら一論説を強調したが、島田虔次や山田慶児の研究を待つまでもなく、中国哲学の伝統には理氣二原論もあるし、理論と現実の二平面の間の弁証法的更新(山田の極構造理論)もあるわけ、そうした「反証」factcheckに照らして見ると、どうも王賓の説明は、西欧に對して中国の独自性を強調しようとするあまり、いささか外国人向けの、そして西欧の東洋信望に阿るように「変成」deformされた議論の印象が拭えない。

この発言を王賓は自分が中国思想を歪めている(calculusの通常の意味にdeformが混線したらしい)、と指摘されたが、後日(六月一〇日の車中のセミナーで、最近流行の「氣功」Qi Gongを巡って、ふたたびアントワヌと大論争が持ち上がる。自分ではバラサイコロジやカリフォルニアあたりの脳天気なタオイストは大嫌いと言言する王賓が、こゝ「氣」になると、西欧的合理性に刃向かうものだから、自然科学者としては比較的头が柔軟なアントワヌもかたじけなく来る。これでは竹本忠夫氏主導のツクバ・シンポジウムにおいて「新体道」の演技をめぐり日仏間に発生した議論同様の不毛な感情的対立に逆戻りしてしまふ。議論が物別れになったころに、「氣」について要するに言々bodilyのことでしょう、と口を挟むと、アントワヌは突如大発見でもした面持ちで、それで分かったと妙に感心したのだが、これにはかえって当方が当惑した。

市提携により建立)も一瞥はしたい。また美術史家のはしれとして、郊外西、乾隆近辺の永泰公主の墓も訪れたいのは人情だが、いかにせん時間が足りない。午後、陝西省歴史博物館の巨大だが観光収入目当ての威容が毀誉褒貶なかばする四合院建築の地下で展示されている壁画群を鑑賞することで我慢するしかない。一九八七年仏身舍利が発見されて話題になった法門寺も訪問の予定だったが、日程変更のため中止。午前中、薦福寺小雁塔のふくよかなエンタシスのシルエットに義浄を忍ぶことで満足する。慈覚大師円仁が頼った寺である、といってもその意味を西洋人たちに説明するのはむづかしい。

薦福寺のアカシア茂る涼しげな中庭で、笙を交えた古楽器による演奏会を聴く。ル・ビション夫人ジュヌヴィエーヴが専門の知識を披瀝して通訳を手助けた。録音に追われてきちんと記録を取っていないのが悔やまれるが、南方の華やかな祭りの歌、家禽の鳴き声を模した笛の独演、小さなバグパイプとも見える笙の持ち味を生かした裝飾音溢れる楽曲など、西欧化された伴奏の伴わない骨太でしかも軽快な演奏が心地よい(同じグループの演奏テ



蕨福寺境内での合奏風景。
左よりル・ゴフ、コロンボ、王寶、
ル・ビション夫人、ドミニック・ティル、
右端は劉文立。
(6月9日)

「ブ『民衆精英』」がお土産用に売られているが、よくあるようにこちらは西洋音楽の節回しが耳について、とてもお薦めできない。ところが最後に一番お気に入りのを、と注文したところが、演奏されたのは「蜜の光」。おもしろいことに、中国側インテリ参加者たちには一向に違和感はないらしいのだが、ヨーロッパからの参加者たちはこれでは全てぶち壊しと、自分たちもその片棒を担いでいる観光化による惜しむべき「墮落」に憤然とする。結局もうひとつアンコールで旅立ちを言祝ぐ、「典型的に土著」の曲を所望し直す。

欧米の観客むけのサーヴィスと純粹中国なる幻想を求める来客側との擦れ違ひに、はしくなくこの学会そのものの根本的な困難が集約され、それがこればかりは理性では制御できない、感性の水準で露呈してしまったのは、いささかならず皮肉であった。実はその直前には「荒城の月」だったかがある、小生ひとり苦虫を噛み潰したような顔をしていたら、西洋人たちは、あらおまえさん日本の音楽はお好きでないの、などと、他人事のような感想を漏らしたばかりだったのだが。おまけにこの音楽院の演奏家たち、ほかでもない日本に残る雅楽などから、当時の

中国の楽曲の復元しようと試みておられる第一線の研究者でもあるのだから、文化交流とルーツ探し、観光促進と歴史復元との弁証法、そう一筋縄には参らない。おりしもこの日は日本では特別に旗日だったようだが、当方うかつにもとんと気付かず、テレビを見ていた誰かから「おめでどう」といわれて「え、何のこと？」いやはや外国の晴れ舞台で、しっかりと嘆かわしい「非国民」を演じるはめになってしまった。

6/10

昨日午後、飛行機で蘭州に飛ぶ。西安空港には

regular flight serviceというカウンターがあつて、いささか不謹慎ながら笑つてしまふ。そういえばアメリカ合衆国のどこかにはreserved for regular train onlyという但し書きがあつた、とドミニック。となると、いったいどちらがサーヴィスの本義に適切しているか、にわかに判断できないね、などと待ち合ひ時間の気楽な会話。美しい夕日を旅客機の窓越しに見ながらの飛行のあと、残

光が地平線に残る蘭州空港に到着。西安よりなご乾燥し、気温も意外なほど涼しい。西安空港の荷物の扱いはかなり手荒かったとみえて、ジャンルイの

写真機補助機材を入れた強化ナイロンバッグは見事に破裂しているし、フリオ夫妻の高級皮革のスーツケースはコンクリートのうえを引きずられたらしく擦過症だらけ。一昨日合流したアラン・レイもよりによって広州の能書家の友人だからわざわざもらった直筆の掛け軸だけが行方不明という。大学生協ご自慢の万能バッグを試しに使つてみた小生だが、みると手提げの取っ手と肩掛けの頑丈なベルトは金具ごとこへやら。どの荷物にもだいぶん辺境の旅らしい風格が備わってきた。

空港から百キロほど離れた蘭州にもつかう途中であたりはとつぷりと暗闇に包まれ、雨がしとしとと降り始める。両側のおそらくは裸の岩山の様子も定かではない。黄河にそった町外れの、古風で少し草臥れた友誼飯店に入る。食堂での遅い夕飯ももう冷めていく。かにも素朴で飾らないが、食べると口に箸が進む。現地のお客さんたちも一緒に。牌酒も時刻が遅くて服務員の「沒有」の返事に、現地のガイドさんがわざわざ近所で調達してきてくれる。

明けて朝食後、八時三〇分よりただちに貴賓室にて会合。途中敦煌研究院副院長、段文杰 Duan Wenjie 先生がわざわざ表慶訪問に見える。病氣療養中

で蘭州におられるため、とのことだが、いたってお元氣な様子。日本からの参加者ということで紹介され、言葉交わす。学習院大学の秋山光和先生とは同い年だそう。帰国したらよろしくとのこと。その堂々たる風格に、ヨーロッパからの参加者たちは、始めて「本物」の中国人を見た、などといったはしゃいでいる。

この朝の発言は、まず胡守為教授から、昨日の中国と西欧科学に関する議論の補足。マテオ・リッチ Matteo Ricci と徐光啓 Xu Guangqi との見解の対立点を話題に、昨日の姜先生の馬車の説明からもわかるように、中国では地球は方形のものとして構想され、その宇宙観からすれば、方形が安定と平穩のしるしであるに対して円は変化のしるしとして否定的に把握される傾向のあること（おそらく『周髀算經』以来の「方属地、円属天、天円地方」だろう）に言及し、リッチの伝えた地理学的な知識を受け入れ難い文化的土壌と伝統の重みを説明した。また王賓の仮説への反対意見として、中国の論理的思考の証拠に、日本人なら誰でも知っている例の「矛盾」の由来についての話をされたが、これはいささか羊頭苦肉、まるでリッチが仏教と同じ輪廻の思想は

ピタゴラスにもあつて、仏教はその模倣だと決めつけたのとも五十歩百歩。どうも実証的な歴史学者中心の中山大学の教授たちでは、論理学や哲学の話題には十分踏み込めない弱点も露わになつてきた。

残る重要な論点は「疑いに付す」という態度が中国の思想に内在するか否かの検討だが、天と人との合一を理想とし、その天の秩序は不易なものである（先程の「四」の説明と矛盾するようだが）などなどの五行説の初歩的解説を述べるに留まった（革命の概念については追ってウルムチで考察することになる）。全般にダンシャンが西欧科学の特徴と見なしたものが、基本的には中国にもある、とする護教論的色彩が濃い論調で、やや失望。コスモロジーについては、アラン・レイから、これは常識だが、と断つて、あくまでリッチの伝えた体系がコペルニクス以前のプトレマイオスの天動説であつた点が確認された。

そのあとコメントを求められたので、レイの話について、また昨日のル・ゴフの提案を受けて概略次のように述べた。リッチが西欧から中国に何をどのように伝えたかについては、受け入れ側の状況を見越した判断が下されてい

る点に注目したい。もちろんコペルニクスの体系は一五四三年（種が島同い年）の公表とはいえ教会未公認であるから、リッチが中国に伝達したはずもないが、プトレマイオスの体系のほうが中国の宇宙観にとつてより受け入れやすいものであつたことは否定できない。これは意図的な選択とは言えないが、しかし「天主実義」の論述は当時のカトリックの公教要理とはかなり離れたもので、リッチはあくまで中国の文人たちに接近するために儒教思想に接近し、逆に仏教思想、道教思想は徹底して拒絶するという、かれの読者層を意識した意図的な選択に基づいて執筆したものだと判断できよう。リッチによるキリスト教の神と儒教の天との同一視はいわゆる典礼論争に発展することとなつたが、そうした基本的コンセプト——マテーム——の比較の可能性そのもの、および伝播によるその変貌の条件を再検討することが、われわれの会合の目的であるはずだ。

具体例を挙げよう。これは平川祐弘氏の名著「マテオ・リッチ伝」にある指摘だが、「己所不欲、勿施於人」をリッチはマタイ伝七——二、ルカ伝六——三のイエズスの言葉（「汝らが人にせられんと欲するところを、汝らも、その

ままに人に行なえ」と同一視しようとした。だが哲学的、倫理学的には両者は肯定と否定において逆の教えを説いていて、東西の倫理観の対照——受け身の姿勢と押し付けがましさと——をむしろ際立たせる例だろう。しかしこの同一視——そこには例の東洋にキリスト教の真理の確証を見いだそうとする西欧の夢がまたしても反映している——によつて、リッチは中国哲学の知恵をキリストの教えの内に包接しようとした。こうしたリッチの側の普遍主義と、典礼論争における康熙帝の中国皇帝としての利害——キリスト教は儒教と矛盾しないがゆえにその布教を許可する——とが互いに重なり合つて、ある「真理」を支える力関係の *symmetry* をなしていた。こうした歴史性を捨象して、やれカトリック教会の公式の見解によれば天と神とは違うのだから、リッチは歴史的に間違つていた、などと超歴史的に決め付けることは、論者のオーソドキシイのイデオロギーの表明にはなつても、我々の目指す、「普遍を目指す異文化理解における誤解」の考察としては、あまりに不用意かつ不十分な判断だろう、うんぬん（この件では、追つてマカオでの会合の席で、時間不足もあつたにせよ、ある



薦福寺境内での合奏風景。
左よりル・ゴフ、コロンボ、王賓、
ル・ビション夫人、ドミニック・ティル、
右端は劉文立。
(6月9日)

「民衆精英」がお土産用に売られているが、よくあるようにこちらは西洋音楽の節回しが耳について、とてもお薦めできない。ところが最後に一番お気に入りのを、と注文したところが、演奏されたのは「螢の光」。おもしろいことに、中国側インテリ参加者たちには一向に違和感はないらしいのだが、ヨーロッパからの参加者たちはこれでは全てぶち壊しと、自分たちもその片棒を担いでいる観光化による惜しむべき「墮落」に憤然とする。結局もうひとつアンコールで旅立ちを言祝ぐ、「典型的に土着」の曲を所望し直す。

欧米の観客むけのサーヴィスと純粹中国なる幻想を求める来客側との擦れ違いぶりに、はしくなくこの学会そのものの根本的な困難が集約され、それがこればかりは理性では制御できない感性的水準で露呈してしまったのは、いささかならず皮肉であった。実はその直前には「荒城の月」だったかがある、小生ひとり苦虫を噛み潰したような顔をしていたら、西洋人たちは、あらおまえさん日本の音楽はお好きでないの、などと、他人事のような感想を漏らしたばかりだったのだが。おまけにこの音楽院の演奏家たち、ほかでもない日本に残る雅楽などから、当時の

中国の楽曲の復元しようと試みておられる第一線の研究者でもあるのだから、文化交流とルーツ探し、観光促進と歴史復元との弁証法、そう一筋縄には参らない。おりしもこの日は日本では特別に旗日だったようだが、当方うかつにもとんと気付かず、テレビイを見ていた誰かから「おめでとう」といわれて、「え、何のこと？」いやはや外国の晴れ舞台で、しっかりと嘆かわしい「非国民」を演じるはめになってしまった。

6/10 昨日午後、飛行機で蘭州に飛ぶ。西安空港には

Irregular flight service というカウンターがあって、いささか不謹慎ながら笑ってしまふ。そういえばアメリカ合衆国のどこかには *reserved for regular flight only* という但し書きがあった、とドミニック。となると、いったいどちらがサーヴィスの本義に適合しているか、にわかには判断できないね、などと待ち合ひ時間の気楽な会話。美しい夕日を旅客機の窓越しに見ながらの飛行のあと、残光が地平線に残る蘭州空港に到着。西安よりなお乾燥し、気温も意外なほど涼しい。西安空港の荷物の扱いはかなり手荒かったとみえて、ジャン・ルイの

写真機補助機材を入れた強化ナイロンバッグは見事に破裂しているし、フルオ夫妻の高級皮革のスツークイスはコンクリートのうえを引きずられたらしく擦過症だらけ。一昨日合流したアラ・レイもよりによって広州の能書家の友人からわざわざもらった直筆の掛け軸だけが行方不明という。大学生協ご自慢の万能バッグを試しに使ってみた小生だが、みると手提げの取っ手と肩掛けの頑丈なベルトは金具ごとどこへやら。どの荷物にもだいいぶん辺境の旅らしい風格が備わってきた。

空港から百キロほど離れた蘭州にもつかう途中であたりはとつぷりと暗闇に包まれ、雨がしとしとと降り始める。両側のおそらくは裸の岩山の様子も定かではない。黄河にそった町外れの、古風で少し草臥れた友誼飯店に入る。食堂での遅い夕飯めももう冷めていくかに本素朴で飾らないが、食べるほどに箸が進む。現地のお客さんたちも一緒に。牌酒も時刻が遅くて服務員の「没有」の返事に、現地のガイドさんがわざわざ近所で調達してきてくれる。

明けて朝食後、八時三十分よりただちに貴賓室にて会合。途中敦煌研究院副院長、段文杰 *Dan Wenjie* 先生がわざわざ表慶訪問に見える。病氣療養中

で蘭州におられるため、とのことだが、いたってお元氣な様子。日本からの参加者ということで紹介され、言葉交わす。学習院大学の秋山光和先生とは同い年だそう。帰国したらよろしくとのこと。その堂々たる風格に、ヨーロッパからの参加者たちは、始めて「本物」の中国人を見た、などといったはしゃいでいる。

この朝の発言は、まず胡守為教授から、昨日の中国と西欧科学に関する議論の補足。マテオ・リッチ Matteo Ricci と徐光啓 Xu Guangqi との見解の対立点を話題に、昨日の姜先生の馬車の説明からもわかるように、中国では地球は方形のものとして構想され、その宇宙観からすれば、方形が安定と平穩のしるしであるに対して円は変化のしるしとして否定的に把握される傾向のあること（おそらく『周髀算経』以来の「方属地、円属天、天円地方」だろう）に言及し、リッチの伝えた地理学的な知識を受け入れ難い文化的土壌と伝統の重みを説明した。また王賓の仮説への反対意見として、中国の論理的思考の証拠に、日本人なら誰でも知っている例の「矛盾」の由来について話をされたが、これはいささか羊頭告肉、まるでリッチが仏教と同じ輪廻の思想は

ビタグラスにもあつて、仏教はその模倣だと決めたのとも五十歩百歩。どうも実証的な歴史学者中心の中山大学の教授たちでは、論理学や哲学の話題には十分踏み込めない弱点も露わになつてきた。

残る重要な論点は「疑いに付す」という態度が中国の思想に内在するか否かの検討だが、天と人の合一を理想とし、その天の秩序は不易なものである（先程の「円」の説明と矛盾するようだが）などなどの五行説の初歩的解説を述べるに留まった（革命の概念については追ってウルムチで考察することになる）。全般にダンシヤンが西欧科学の特徴と見なしたものが、基本的には中国にもある、とする護教論的色彩が濃いい論調で、やや失望。コスモロジーについては、アラン・レイから、これは常識だが、と断つて、あくまでリッチの伝えた体系がコペルニクス以前のプトレマイオスの天動説であった点が確認された。

そのあとコメントを求められたので、レイの話について、また昨日のル・ゴフの提案を受けて概略次のように述べた。リッチが西欧から中国に何をどのように伝えたかについては、受け入れ側の状況を見越した判断が下されてい

る点に注目したい。もちろんコペルニクスの体系は一五四三年（種が島同い年）の公表とはいえ教会未公認であるから、リッチが中国に伝達したはずもないが、プトレマイオスの体系のほうが中国の宇宙観にとってより受け入れやすいものであったことは否定できない。これは意図的な選択とは言えないが、しかし『天主実義』の論述は当時のカトリックの公教要理とはかなり離れたもので、リッチはあくまで中国の文人たちに接近するために儒教思想に接近し、逆に仏教思想、道教思想は徹底して拒絶するという、かれの読者層を意識した意図的な選択に基づいて執筆したものと判断できよう。リッチによるキリスト教の神と儒教の天との同一視はいわゆる典礼論争に発展することとなったが、そうした基本的コンセプト——マテーム——の比較の可能性そのもの、および伝播によるその変貌の条件を再検討することが、われわれの会合の目的であるはずだ。

具体例を挙げよう。これは平川祐弘氏の名著『マテオ・リッチ伝』にある指摘だが、『已所不欲、勿施於人』をリッチはマタイ伝七一一、ルカ伝六一三一のイエズスの言葉（汝らが人にせられんと欲するところを、汝も、その

ままに人に行なえ）と同一視しようとした。だが哲学的、倫理的には両者は肯定と否定において逆の教えを説いていて、東西の倫理観の対照——受け身の姿勢と押し付けがましさと——をむしろ際立たせる例だろう。しかしこの同一視——そこには例の東洋にキリスト教の真理の確証を見いだそうとする西欧の夢がまたしても反映している——によって、リッチは中国哲学の知恵をキリストの教えの内に包摂しようとした。こうしたリッチの側の普遍主義と、典礼論争における康熙帝の中国皇帝としての利害——キリスト教は儒教と矛盾しないがゆえにその布教を許可する——とが互いに重なり合っている「真理」を支える力関係の context、background をなしていた。こうした歴史性を捨象して、やれカトリック教会の公式の見解によれば天と神とは違うのだから、リッチは歴史的に間違っていた、などと超歴史的に決め付けることは、論者のオーソドキシイのイデオロギー的表明にはなつても、我々の目指す、

「普遍を目指す異文化理解における誤解」の考察としては、あまりに不用意かつ不十分な判断だろう、うんぬん（この件では、追ってマカオでの会合の席で、時間不足もあつたにせよ、ある

6/11

夜明け前に突然停止したきり、ウルムチ行き

ポルトガル人神父が曰く、ようやく十八世紀になって教皇ベネディクト十四世の裁定によりこの論争に決着がついた、などという公式見解を報告して事足れりとするのを見て、あらためて哑然とし、辟易させられることになる。

大急ぎでバスに乗り込み、曇天のなか「黄河母親」とある影像を臨む展望台へ。「お写真」をそそくさと済ませると、もう市内観光の暇もなく、渋滞のなかをただちに駅へ急行。一時二〇分発車の長距離列車に乗り込む。目的地の柳園まで、予定では二四時間ほどの旅程となる。午後の車中セミナーについてはすでに記したので省略する。コンバティメントに入ったとたんに持参のウイスキーを空け始めたイタリア勢はやがて人間ジュークボックスと化し、ウンベルトの超人的なレパトリーと、パオロの即興の合唱の才をまざざと見せつけ、ならぬ聴かせつけられる。近所のコンバティメントの子供たちまでやってきて、囁き立てる。秘書として同行の中山大学歴史系のお嬢さん講師、葛建平のJiangpingの誕生日だったことも判明して、そのパーティまで始まり、一同大騒ぎのまま列車の夜は更けて行った。

列車はいっこうに発車する気配がない。朝になってあたりが明るくなってしばらくすると、王賓がEmissaryと告げて回る。昨日の集中豪雨で前方の線路の路肩が流されたので、あと数時間は動けない、とのこと。状況偵察のため駅に降り立ってみると、そこは酒泉だった。王翰の涼州詞、「葡萄美酒夜光杯」であまり有名な夜光杯の生産地として知られる。朝の空気が肌寒いほどだ。左手南方には、緑の絨毯のような平原のむこうに、祁連山脈の主峰、海拔五五四七メートルの祁連山が雪に覆われた頂きと青い山麓を覗かせている。いつになったら出発するのやら皆目見当もつかないが、中国のひとりたちはもう慣れっこなのか、駅から外へ出て町から熱々の拉麺などを丼ごと貰ってくる。立ちのぼる湯気が朝の雰囲気にかにも似つかわしく、生活の匂いも好ましい。そうこうするうち、進行方向から蒸気機関車が一台戻って来る。どうやら予定より早く復旧したらしい。午前八時までに、三時間あまりの遅延で酒泉を後にする。周囲はほどなく緑を失い、あとは広大な砂と岩山だけの砂漠

が左右に広がる。

午前中、車中の食堂車でセミナー。漢字と記号学の顔合わせで、まず姜さんがレナタ・エーコ夫人が持参していた漢字教本を手掛かりに、鸞、鼎、鬲の三つの文字について、文化史的背景を含めて解説し、そのあとウンベルト・エーコが西欧の記号学ないし修辞学の基本的な用語を解説して、はたしてその等価物が中国詩歌の伝統にあるかどうかを尋ねた。こうなると両方のことが（一応）分かっているのは日本人だけになってしまう。そもそもKuhnとかHeideggerの定訳すらないところに、méphophté, synecdoque, metonymieだ、といつても、何が上位概念で何が下位概念かも不明確のままでは話には徒に混乱するばかりである。おまけにヨーロッパ側には、要するに表意文字の性質が、理屈では分かってても、実際のところ飲み込めていない。西洋語で巧みにその機能を説明すればするほどなんだかやたらと神秘的に見えて来て中国幻想を刺激する。おそらくこの朝が全行程中一番珍漢な議論だった。François ChengのLe Vide et le plein, L'Écriture poétique chinoiseの一部のコピーを持参していたこともあって、日本での定訳などを示し、なけなしの知識

も動員して漢詩の空間的な配置規則なども説明して、東西両者の取りまとめに努力はしてみたが、結局なんだか話ばかり合わないままに、ほどなく嘉谷関通過といふので、一同大騒ぎになり、セミナーはうやむやのまま終わってしまった。あとでウンベルトとも話したことが、あつて存在しない概念を受けいれようにも表音文字が存在せず、すべてを漢字に頼るほかにないためにそもそもphonetic（能記）とsemantic（所記）とを分離して考えることが原理的にも不可能な中国漢字文化のうなじの堅さ——というか、日本の融通無碍ぶりとは対照的な不自由さ——を痛感させられる、それは見事なほどにも滑稽な紛糾ぶりだった。

夕刻六時すぎ、ようやく敦煌への入り口、柳園駅に到着。経度の関係でまだ太陽は高く、午後三時ぐらいの感覚である。敦煌研究院の王惠民 Wang Hui-minさんの出迎えを受ける。予定では一般公開の終了後、日没までの時間、われわれだけの特別参観が準備されていたのだが、列車の遅延のため、残念ながら中止。計画変更についてひと悶着のあと、さらにバスで二時間近く走る。左右の砂漠には不思議な土饅頭が点々と続き、遙かには峻厳な岩山が見える。

蟹気楼が現れては逃げ水となつて消えてゆく。ようやく夕刻迫るころ敦煌賓館に着。

夕食の後、夕聞せまるなを月牙泉に向かう。到着した頃はすでに真つ暗闇。わずかに砂丘の影の見えるなを往復一時間ほど砂地を踏んでの散歩。露店でお茶を飲みながら歌の披露。劉文立も見事だったが(題名をすっかり尋ねそこなつたが悲恋の熱唱)とくに所望されたのはウンベルト・エーコ秘蔵の替え歌。ソシユールのお陰で離別しなくてはならなくなつた *separat* と *separat* との悲しい愛の物語を「枯れ葉」のメロディーに乗せるという趣向のパロディー。途中、*le champ & l'aridite* *de l'été* なんていう傑作な一節があつて、爆笑もなのだが、残念ながら作詞家は昨日来タバコの吸いすぎで、世界初の盗み撮り録音(内緒)は不調に終わった。

6/12

朝からいよいよ莫高窟の見学である。いろいろ

と書き連ねたい誘惑も大きいがある。同僚の中国美術史家宮崎法子氏や、若手の研究者中河原育子さんらの助けを得て不完

全ながらあらかじめ予習していた知識と、そんな予備知識などあつたりと乗り越える現実と、そしてわずか半日の短すぎた訪問の悔恨とのあいだの矛盾がないまぜになる。素人のナイーヴな感想を綴る勇気もなければ、友人はだしに見聞成果の一端を誇らしげに開陳するのおこがましう、さらには分かる人にはおりの知れるだらうさかしらめいた評論家の言辭を連ねる勇気もない。ただ夢中で記録したノートの内容の判読不能なデッサンとみみず文字に、突如發揮してしまつたみみず文字に職業意識の残骸を見て暗然とするのだが、そんな蹈晦の姿勢そのものが、あまりに自意識過剰な身構だらうか。

もうすこし正直に語る必要もあるだらうか。西魏時代の、最古の銘文を持つ二八五窟には矩尺をもつた伏羲とコンパスをもつた女媧が見えるが、これをもつて中国と西域との文化交流、とりわけ仏教の中国化の様相をひたすら強調しようとする中国人研究者の立場には、すでに木下長宏さんも『敦煌遠望』で表明しているのと同じような疑念を抱かすにはいられなかった。段先生のみならず、現地での解説の榮を賜つた史寧湘先生や、先生として、同行の姜さんまでも共有される一種の中

華イデオロギーは、文革を経験した多くの誠実な学者たちにとつて、その研究者としての生命を断たれないための最低限のハベトウスだったのかもれない。これを相対化する腹案を日本から持参したものの、結局は主催者がわの判断でより「大物」の発言に譲ることになり、いささか片腹痛き妥協を飲むことになった。

おそらく初めての観光客としては、九六窟の大仏など省略して良いから、二一七窟の山水、五七窟の脇侍はじめ、四五窟、二一窟、四二八窟、一三〇窟などを、といった要求をするほうが不遜というものだらう。それでも、一行のなかになんかことを求める知つたかぶりのいることが分かると、予定時間を延長していくつか追加の参観を許された。日本では京都奈良を救つた恩人とされるウォーナーを糾弾するために、かれが菩薩像一体をもち去つた三二八窟はもちろん見学しなければならぬし、井上靖『敦煌』の読者ならずとも世紀の発見となった經典その他が秘蔵されていた十六、十七窟の由来に耳を傾ける必要はあるだらう。加えて、唐代の代表的な彫像が保存されている四五窟をゆっくり拝見できただけでも多

とすべきだらうし、最後に二五七窟で

最初期(北魏)の白い鹿の描かれたジャータカの本生譚をゆっくりと鑑賞できたのは、ロマネスク絵画の専門家も含むアルカイック趣味のヨーロッパ人にはまさに格好の選択で、管理をする軍閥係者から最初はただの観光客同様の扱いをされてすっかりお冠だったル・ゴフ夫妻も、これにはいたく満悦だったのは何よりだった。お年のせいかややもすると爆発して難しくなるものの、知的好奇心においては青年顔負け、といったあたりが、今回同行の歴史家たちの、やはり一流といわざるをえない風格であろうか(当方の知っていた日本伝来のジャータカの物語では、悪役は鹿に助けられたことを王に告げた男なのに、ガイドのお嬢さんの解説では、悪いのはむしろ男の報告を聞いて鹿狩りを要求した王妃と食い違つていて、ル・ゴフ夫人に説明した手前、すくなくからす困つたのだが。

昼食を潰してでも、あれも見たいこれも見たい、今度こそ榆林窟も許可が出るかと思つたのに、などと駄々を捏ねる小生に姜先生が、はくはもう何十年も難渋念と通つて論文も余技ではあるが、きちんといくつも公表している。それでもよそ者だからまだ見たくて見られない窟が沢山あるのです、あなた

のように将来のある(?)。学者ならまだまだ何度も機会があります、「また今度」などと(日本語を交えて)論されて、おとなし引き下がる。このあたりはむしろ東洋風の阿吽の呼吸。下手に西欧側を刺激しては逆効果であることは日中双方とも分かつたうえでの陽動作戦であるから、ほどほどのところで撤退することした。

そもそも、ホテルまで引き返す時間を惜しんで、昼食を研究院の建物のなかの貴賓室に持ち込んだ弁当で済ませることからして、普通の観光客にはありえない特権待遇だった。お弁当を平らげる暇もあらばこそ、さっそく、研究院の要人研究者たちと討論に入る。必ずしも美術史の専門家ではない立場からの意見交換が、それだけでも例外的な会合だ。外国文化要素の受容についての検討を主眼に、目立つところお嫌いな中山大学の蔡先生が司会を務めるなか、中国側は研究院福所長樊錦詩 Fan Jing-shi 夫人の挨拶のあと、賀世哲 He Shi-zhe 先生から仏教図像学「アイコノグラフィ」の話として、偽経「須彌四域経」により伏羲が寶應聲菩薩に、また女媧が寶吉祥菩薩に模された混交のこの解説、そして案内の労を取ってくださった史先生からの八五、二八

五およびその中間形態としての一四八窟に即した、中国における小乗から大乘への重点の移動にかかわる談話。いずれも美術史家ならよく知っている有名な研究者ばかりであるが、また文化変容を具体的に立証する図像上の混交を巡る解説内容も敦煌を巡る文化交流史の専門家ならすでに先刻熟知の話題である。通訳は連日朝から晩まで八面六臂の活躍を続けるドミニックと劉文立。

こうした外来文化への柔軟な受容姿勢について、キリスト教世界での場合を対比例のモデルとして要約したル・ゴフさんの答弁はいつもながら極めて明快。一神教(ないし異端の可能性、つまり複数性)、選民意識(その欠如による普遍性)、聖職と世俗権力との関係(両者の分離独立)、啓示宗教(Christianity)の原則による、教義からの逸脱に対する寛容性、および教義上での聖と俗(十三世紀以来の哲学の独立と脱魔術化)という五点にわたって、結局はキリスト教の複数性と開放性(covering)とを少々強調しすぎたのは、場所柄有和志向の弁述を要求されていたためか。アラン・レイも指摘したように、ここにアラブ・イスラーム圏、ベルシア文化圏の証言も加えなくては、いかにも

釣り合いに欠けるのだが、アフリカのイスラーム化について報告する予定だったマリの友人ムサ・ソが突然政府高官に抜擢されてしまつて参加不可能となったため、この部分の欠落には補いがつかなかった。

会議の後、列車時刻の関係で挨拶もそこそこ、情報交換も満足にできないまま慌ただしく出発(ヨーロッパ側は中国側はどういう出席者があったのかを把握する余裕もなく、旅程ごとに新聞記事を書いているファックスで送っていたフリオからは、列車に乗ってから誰が何をしゃべったのか、のブリーフィングを依頼されたりもした)。途中砂嵐となり、視界ゼロのなかを突っ切る。まだ列車のダイヤは乱れていたが、一九時前には出発。われわれの眼前で客車が一两付け足されたにもかかわらず、なぜか乗り合わせた日本人の団体さんとコンパティイメント争奪戦となる。結局、勝利をおさめたのは中国ずれたわれわれ一向。遠慮という美德を発揮した日本人側は全員締め出され、廊下にて待機。コンパトリオットとしてははなはだばつが悪い。車掌(純朴清楚なお嬢さんたち)はもちろん規定人数分しか予約料を受け取っていないから、それ以上の車両が手配されて

いないのもいわば当然である。どうやら土地の旅行代理店の予約受付係が人数を半分に偽って(つまりダブル・ブッキングして)超過分を着服のうえ出車直前に姿をくらましたらしい。だがそうと知れたのは発車後小一時間も経ったころ。逃亡直前の現場をわがカメラマン君はちゃんとカメラに収めていて、それに気付いた被疑者がなぜ急に逃げ出したかその後によってようやく納得した次第、とははかなぬジャンルイの弁だが、真偽のほどは確かめようもない。結局かわいそうな日本人たちは、貨物倉庫の荷物の山を乗り越えて、遠路遠々硬座寝台車の方に移動するはめになった。これでいちおうは一件落着。車内泊。翌朝、トゥルファン(吐魯番)駅下車。朝日が美しい。

6/13

人数確認漏れからか、中型のマイクローバスにぎゅうぎゅう詰めとなって、あちこちに緑の点在する沙漠のあいだの道を揺られること一時間にして、オアシスの町トゥルファンに入る。途中カナートの井戸が地下水路のありかを示しているのを見て、北アフリカではホガラツて言うんですってね。日本にもマンボと

いうのがあるのですよ、などと姜先生と雑談。昨日来気管支炎で発熱のウンベルトはじめ、ご老体たちに疲れが目立つため、朝から部屋を確保していたはずが、これまた連絡不行き届き。そもそも到着した緑州（オアシス）ホテルには予約が入っていなかったらしく、大騒ぎのすえ朝食食い逃げで、吐魯番賓館に移る。ところがこちらでもかつてのコロニアルスタイルの旧館ではなく（ここにはやっぱり昨日の日本人ごと向様ご宿泊）、ポストモダンな新館を宛てがわれる。これが昨日建ったばかりで、まだあちこち工事中。ようやく試し運転開始といった様子の代物で、停電、断水もしょっちゅう。窓口の女の子たちも初出勤どころか、まだ見習い研修以前。客室の鍵までなくす有り様で、仕事の要領も飲みこんでいないけれど、まあ文句をいうのも大人げない。水も貴重なこんなオアシスの町に外国から大量の観光客が押しかけて、冷房から温水風呂までのヨーロッパ式のサービスを当然のように要求したりすれば、たいへんな観光公害だろう。むしろ摂氏四十度を越えるこの気温を満喫しなくては、せっかくトゥルファンまで来た意味がない。

客室に入ったきりもう当分動きだし

そうもないご老人たちを尻目に、ジャンルイとバザール見物に出掛ける。まだ小さな堅い緑の房をつけただけの涼しげな葡萄棚の下をくぐって歩いて十分とかならない。町の中心部は消費文明、若者文化にすっかり「汚染」されているが、市場は別世界。色鮮やかに衣服をまとった、美しく影のない、と月並みな表現で認めるしかない。ウイグル族の女性たちが行き交う。さすがに思春期の子だけはカメラを向けると大袈裟に恥ずかしがって逃げ回ったりはするものの、それでもいたって屈託がない。

傍でジャンルイの撮影ぶりを見ていてあらためてフロ・カメラマンの貪欲さ、勇敢さ、人徳と、そしてなにより心理作戦まで応用した心憎い対象接近術に感心する。女の子たちをいったん追いかけて回してみても、すぐには駄目だが興味はある様子だなと見て取ると、深追いせずにかえって気のないような素振りを装ってやり過ごし、対象が自分からカメラに接近してくるのを知らんぶりに待ち、警戒の緩んだ所でちやっかしてシャッターを切る。目的を達するとアフターサービスに愛嬌まで振り撒き、一座をひとしきり笑わせてから、またね、とウインクして決める。

逆に押し売りがやってくる、かれらのゲームの規則に乗るような素振りでも自分の目的を達すると、そこで一転してさつと振り切ってしまう。いやはや堂にいったものだ。当方より一瞬はやく、より適確なアングルからチャンスをお次々ものにしてゆく。何度も機先を制されてはしてやられ、やはりプロだわい、と舌を巻き、これでは相手になりぬと早々に敗北を認めた。慎重すぎている一瞬の躊躇に泣かされ、肝心な時にはひとに譲って後手に回ってばかりという、いささか不甲斐ない当方の優柔不断な性格も、すっかり見抜かれた感じで、アマの甘さというものにも改めて合点がいき、妙に納得してしまう。

「ホータン製の絹、カシユガル製の帽子、カザフ族の刺繍、上海製のレース、金、銀、赤、緑と極彩色の世界だ。ラジカセのポリウムを最大にして、ウイグルの音楽が聞こえて来る」とはいまや日本が世界に誇るガイド・ブック、おそろしく無責任だが外国人を煙にまくには存外役にあたつと、今回の旅行で分かった「地球の歩き方」にある文句だが、初めて訪れた無知な人間にこんな正確な観察などできようはずもない。音と色彩と嗅覚のセンス・

データが一度に許容量の針を振り切つて押し寄せて来る。カーペット売り場、雑貨売り場の人込みと喧噪とを通り抜けると、今度はツンとして石炭の煙りが立ち込め、香ばしい羊肉のかおり漂う清真食堂では、油したたるドナーケバブを切り降ろしている。地面に落ちた残骸を後片付けをはじめた野菜売り場、強烈な香りにむせそうな香辛料売り場。真っ赤なピーマンにトマト。巨大なナスに腕ほどもあるキュウリ。山と積まれたスイカやハミクワ。そろそろ引け時も近く、荷物を満載した車を口バがひいてつぎつぎに往來する。その先には白い TENT を張った金物屋や露店がさらに延々と軒を連ねる。こちらには大工道具の山、あちらには家畜売り場に蹄鉄屋。運動場のような空き地にはヒッジ、ヤギ、ウマ、ウシ、さらにはラクダまで所せましと並べられ、カラッとした炎天下、家畜たちの体臭も心地よい。

そのうちに家畜番の子供たちが好奇心から寄ってくる。とにかくカメラに撮ってもらえば満足で、そのために殺到してくる。もう慣れつつこのはずなのファイナダーを覗かせてやるとお喜び。いまだに観光客に奇異の視線を向けるでなければ、かといって観

光客ずれして媚びを売るでもない。写真機をもつていことがとりたてて気にもされず気にもならない。被写体や撮影する自分を意識することもなく、実に自然に溶け込める雰囲気というのは、世界中そんなにあちこちにあるものではない。(むしろ「文明国」のほうがやましい)。だが、親光化の波に洗われはじめた昨今では、このなごやかな人情もいつまで続くものやら。

*

本日はすばらしい好天に恵まれた。昼食のまえに、炎天下を町外れの蘇公塔に参上。周囲にはすでに砂漠が広がっている。高さ四四メートルものの本にある円柱のミナレットをもつ白亜のモスクの外は焦熱地獄さながらだが、ひとたび内部に入ると薄暗くひんやりとしていて、ほっとする。モスクはこの開放感と安心感がいい。泥ぶきの屋根のあちらこちらの穴から日光が幾筋が射し込んでくる。文化大革命のあいだ

新疆に強制移送されて十三年間を過ごした王賓は、十年ぶりに聞くウイグル語をすくにも思い出したらしく、モスクの管理人夫妻と話こんでいる。日蔭で風にあかれて四十度を越える気温が信じられないほど心地よい。取った水分が汗にもならず体表からす

ぐさま蒸発して体温を冷却してくれる様が、理屈でなく実感される。

昨日車中で、急遽アランから本日の研究会発表を命ぜられていた。おかげではかの参加者がすばらしい昼食ののちあかかにシエスタを食つておられるのを尻目に、ホテルの部屋で予習に追われる。もうこのあたりで、出発前の日程表にあった発表日時はまったくの反故となっていた。午後三時からの予定をホテル支配人の忠告を入れて五時からに延期。それでも経度ゆえまだ猛暑の昼下がり。会場はホテル中庭の葡萄棚の下に絨毯を敷いた、いかにもトゥルファンならではの演出。最初は熱気で頭がはっとしていたが、なるほどこの時分からようやくころかなしく気温が落ち始め、名産の葡萄飲料を口にしながらお茶をすすると通りすぎる風がすがすがしい。五時ととってもまだまだ太陽は高く、日没までなお優に四時間はある。

報告は一文ごとに通訳する方式が定着してきたので、準備してきたペーパーを棒読みするわけには行かない。通訳に配慮しつつ、その場で必要最小限の内容を適確な言葉で高密度に組み立てて伝達しなければならぬ。あらかじめ三重大学大学院生李曼くんの協力

を得て作成しておいた中文要約を配布のうえ、通訳の都合もあって即興のフランス語でしゃべる。材料には小堀桂一郎先生との研究である仏教説話の西漸と東漸を紹介させていた。(三)三人の友の話・古活字本「伊曾保物語」下巻三話と「エヴリマン」説話、「エヴリマン」説話の根源と伝承」それぞれ「比較文学研究」三〇、三四号、それを今回の会合の主旨に照らして敷衍した。

仏陀の出家譚が中世ヨーロッパに伝わり、仏陀が聖ヨアサフなるキリスト教の聖人のひとりとして伝承されていたこと。それにまつわる寓話のいくつかがいソップ物語に取り込まれ、「三人の友」の話などとして十六世紀末には日本に逆輸入されたこと。さらにはヨーロッパに伝承していた同様の寓話をマテオ・リッチがおそらく仏教説話起源とは知らずに「畸人十篇」の中に漢訳したこと。そしてこのリッチの著作に見える説話が仏教起源であることを平

田篤胤が十九世紀はじめに著述した『本教外篇』で見抜いていたらしいこと。以上の事実関係の推定はすべて村岡典嗣「平田篤胤に於ける耶穌教の影響」(大正九年)「日本思想史研究」所収)をはじめとする諸研究を総合した小堀

論文に依拠している。そのうえで、ではこの経緯は文化交流のうえで何を意味するのだろうか、というのが小生の設問である。

以上の事実を前提にして篤胤の宇宙論を考察してみると、文化事象の伝播と普遍性への希求との関係が露呈してくる。つまり本地垂迹説では仏教の派生形態として理解された神道は、逆本地垂迹説においてむしろ神道から派生したのが仏教とする解釈へと転倒したが、それを経て出現した篤胤の復古神道に至っては、篤胤自身は明言していないものの、『本教外篇』の知見をもつてすればキリスト教さえも神道の正統性の証拠として利用できる段階に至っていたことになる。いわばマテオ・リッチの普遍の夢の裏返しに日本にも出現したわけだ。だが、さらに興味深いのは、リッチにおいて儒教の天の概念と結合されたキリスト教の人格神の概念が、ここで篤胤をして日本神道の神概念を刷新する理論的支柱となつたとする解釈さえ存在する点であろう(この点については、その後発表された子安宣邦「国学における神の再・形象化」小堀桂一郎編『東西の思想闘争』中央公論社、一九九四年参照)。いわば普遍への夢と同一視の誤解の危険とは、リ

ツチを引き合いにだした康熙帝の場合のみならず、篤胤の場合にも表裏一体に機能していたわけだ。さらに言えば、外国からの影響を否定し拒絶して国粹主義的な神道解釈を準備したといわれる *foundamentalist* 篤胤の神解釈が、じつはキリスト教の儒教的解釈という伝統を背景に持っていた。そうした脈絡と密接に絡まり仏教までも含めて篤胤に至る一本の糸の存在を象徴するものこそ、件の「聖ヨアサフ」伝説という説話の「粹」、地球規模での渡り *mobility* *but* でもあったわけだ。

狭義の神学的教義からは離れた説話や寓話は、それだけに厳密な教義論争の対立を越えて伝播し、さまざまな文化圏へと浸透する「普遍性」を宿している。だがそれはかえってそれゆえに矛盾する解釈をおのが内部に取り込んでしまいい得るという意味で、逆に宗教間の葛藤の原因ともなりうる両義的な存在である。逆説的なことに、リッチによって伝えられた「三人の友」という形の説話は、その原型を保存しているべき仏典の漢訳には今のところ知られていない。イデアアルティプスは伝播の原初にあつてそれが派生分化したのではなく、むしろ文化交流の過程における変成作用のさなかに鍛練された、と

も言える。同じ群に属する説話にトルストイが深い人生の洞察を認めたことは、「告白」にもみられるとおりである。云々。

以上の発表について実にさまざまなコメントを頂戴した。以下方法論、受容形態、受容条件の三点に整理する。方法論については、共通の語りの *discourse* が解釈の文脈によって異なった意味を帯びることを強調するアラン・レイ *Alan Ray*（その卓抜な司会に助けられた）、また昨日から夜汽車のなかで漢文資料を解読してコメントを準備してくださっていた姜先生、さらに特に発言を求めたル・ゴフ——かれは文献学の帝国主義の害悪についてまさに文献学的に罪状を並べはじめて、司会のアラン・レイにその自己矛盾を指摘されたりもしたのだが——これら三人からそろって、中心からの派生、原典とその改竄という伝統的な文献学の考えとは違って、変成作用そのものに研究の焦点を移動させる *transcultural* 文化考察ならではの的方法論意識を注目されたには、手前味噌ながらいささか我が意を得た。もっとも王資は稲賀の発表には方法論がない、類型論的アプロウチが欠如しているから歴史内没で一般化が不可能だ、と批判した。だが、そういう王資本

人の研究は類型論的比較論に終始するため、固有文化本質論から一歩も出られず、文化接触の現場での変成作用を過小評価しかしていない。

また文化変容について姜先生は、莫高窟一八五窟のガネーシャがイラン經由で中国にもたらされると歓喜天という天部に化した例や、老子を阿弥陀の生まれ変わりとみなす習合表象の例を挙げて、篤胤による外来文化要素の換骨脱胎は別段例外的ではなく有りふれたものだ、と反論された。だが当方が問題にしたのは、そのようにして外来の要素を取り込むことでみずからの普遍性の証しに用だてる姿勢が中国にもとよりキリスト教世界にも日本にも「普遍的」に見られて、それが自己文化中心主義と裏腹になっている、という論点だから、この批判は少々かみ合っていない。むしろ「中国にもある、だから当たり前」といった指摘そのものを支える無意識の普遍主義こそ問題ではないかと、再反論。そもそも何度でも登場した *salvation* という言葉がなかなか中国語にならず、訳者一同苦労したのだが（この点もやがてウンベルトが取り上げる）、ようやく探しあてた定訳がなんと「本位化」。いかにも中国人の発想ならではの訳語だ、とそのずれに思

わず苦笑するのも、日本人の小生ひとり。

最後に説話の変貌について、姜さんは漢訳仏典をあらかじめ検討してくれてもいて、ここに取り上げられた説話に見える四人の妻や二種類の友人の比較という設定がむしろ中国人の思考様式に受け入れられやすい説話の形式であることを指摘してくださったが、これには（それまでも漢文を読まずにいた）ル・ゴフから、四人妻がキリスト教世界では無理だろう、という姜先生の説とは違って、*marriage* がまだ宗教上の *engagement* ではなかった西欧中世では、現在の様に妻の地位が強いわけではなく（一同爆笑、別段四人の妻という設定が無理だったわけではないはずだが、むしろ十三世紀からは「友」という概念が西欧中世でいかに大切になったかを、「中世の知識人」の著者の立場から説明して、説話受容の社会的背景を暗示してくださった。そういえばマテオ・リッチもその著書「交友論」によって南昌での成功を博しえたことが思い出される。またこれに対応して、胡先生から、（時代をはっきり何わなかったのだが）中国の場合にも、ここで扱われた説話に見られるような極楽往生を願う涅槃経の流行の背景には、貴族階級

の没落という社会的状況のあったことが指摘された。

最後にリソン・トロサナ教授から、ここでとりあげた「聖ヨアサフ」の逸話も含めて西欧での説話伝播のなかで重要な役割を果たしたアラゴンのコンベルソ（改宗ユダヤ人）、ベトルス・アルフォンシス（Petro Alfonso）の業績について、とくに補足をいただけたのも幸せだった。北京での会合は「一角獣と竜」と題されていて、まさにこの話題でウンベルト・エーコが基調講演をすることになるのだが、伊東俊太郎先生の「二世紀ルネサンス」にもあるように、当時の天文学書『竜について』を著したマルヴァーンのウォルチャールこそは、イギリスに渡ってヘンリー一世の侍医となったこのベトルスの弟子だからである。まことに様々な連想と背景とが碩学たちの口から次々に語り明かされては交錯してゆき、それは興味つきない午後の緑蔭勉強会となった。ひさびさで味わう心地よい知的興奮だった。

*

夜はホテルの中庭でマシユラップ。この旅館の名物もいまではいささか観光化して、洗練されすぎたともいわれるが、雅楽のルーツといわれればまんざらでもない。例の日本人ご一行も引き出され阿波踊りを披露している。いささか中原中也を気取る臍曲がり、ひとり踊りの輪を離れ、暗がりのなかを孤独求めて徘徊する。ほどなく踊りもお開きとなり、ファツプリ夫妻、旦那はまだ寝込んだままのエーコ夫人とテラスで（旦那の寝酒用に買ったはずの）地酒のワインを傾けながらとりとめのない雑談。トゥルフアンのヴィーノ・ブランコはなかなかセツコで、白熱灯の灯る屋外で夜風に吹かれている、思わずバレルモを思い出したとか。こちらでも思わず（*Beizeiten ritten wir aus Palermo*）などというゲーテの『イタリヤ紀行』の一節が（孫びきながら）思いついて、唯一のゲルマニスト、博雅の士バオロを前にして、「限りなくさわやか」な「素朴なこの表現」と菊地栄一先生の評された出立の前後の情景を思わず得意げに朗唱してしまったりする。やはり古典は明師について読んでおくものだ納得。自分では行ったこともない火山島の風景が不思議にも眼前に彷彿とする。記憶という *Mind* を介した *das unmittelbare Leben* の体験、とても気取っておこうか。

それでもない。例の日本人ご一行も引き出され阿波踊りを披露している。いささか中原中也を気取る臍曲がり、ひとり踊りの輪を離れ、暗がりのなかを孤独求めて徘徊する。ほどなく踊りもお開きとなり、ファツプリ夫妻、旦那はまだ寝込んだままのエーコ夫人とテラスで（旦那の寝酒用に買ったはずの）地酒のワインを傾けながらとりとめのない雑談。トゥルフアンのヴィーノ・ブランコはなかなかセツコで、白熱灯の灯る屋外で夜風に吹かれている、思わずバレルモを思い出したとか。こちらでも思わず（*Beizeiten ritten wir aus Palermo*）などというゲーテの『イタリヤ紀行』の一節が（孫びきながら）思いついて、唯一のゲルマニスト、博雅の士バオロを前にして、「限りなくさわやか」な「素朴なこの表現」と菊地栄一先生の評された出立の前後の情景を思わず得意げに朗唱してしまったりする。やはり古典は明師について読んでおくものだ納得。自分では行ったこともない火山島の風景が不思議にも眼前に彷彿とする。記憶という *Mind* を介した *das unmittelbare Leben* の体験、とても気取っておこうか。



火焰山を谷向こうに臨むベゼクリクにて。
議論するアラン・レイ（左）と
ジャック・ル・ゴフ。
（6月14日）

昨日の好天が嘘のよう
な荒れ模様で、朝から

雨がばらつく。物の本にあるトラックではなくちゃんとバスに乗って、最近舗装された道路を一路東へ向かう。ほとんど左手に赤みがかった峻厳な岩山が雁行する。霧が出て視界不良。一時間ほどで、いったん岩山の途切れたあたりから北に方向を転じて山道に差しかかる。右手に新たに現れたなお赤々とそそりた裸の岩壁が、「西遊記」にもその記述を見る火焔山。形状といい色合いといい、まさにびつたりの表現だ。長さ百キロ、幅十キロ標高八五一メートルというが、海拔下のオアシス・トゥルファンから見ればまさに屏風ながらで、立ちほだかる獐狂な赤壁は到底ひとを寄せ付けない。ガイドのお嬢さんに尋ねると、今日は小雨まじりでこんな良い天気はめったにない、とのこと。晴天となれば、気温は六十度を越えるし、ひとたび土砂降りになれば、草木ひとつない粘土はすっかりぬかるんで、ジープでも通れないのだ、という。

その名うての難所、火焔山を正面に、ムルトウク（孜爾吐紺）河の緑の谷を挟んでベゼクリク（柏孜克里克）の千

仏洞がある。十四世紀のイスラーム

「侵入」とともに、大多数の仏教壁画は破壊され、いくつが残った作品も、その主要なものは今ではベルリン、ダーレムのルコック・コレクション特別室で見られるにすぎない。このコレクションの「略奪品」そのものも、第二次大戦の被害を受け、破損を免れたフラグメントも決して多くはない。急に今から早くも十年前のベルリン滞在中のことが思いだされる。突如ふたつのイメー

ジが輻輳しフラッシュバックして、ダーレム美術館まで歩いて十分とからな

い別荘地に宿を宛てがわれたあのころが、年甲斐もなく、無性に懐かしい。

そんな感傷にひたる間もなく、荒涼たる砂丘を背景に有名人たちのスナックを何枚か撮り、沙漠のトイレで用を足し、再びバスに猛烈に揺られてこの孫悟空も困った京劇の見せ場のひとつたる「窮地」を脱出する。次を目指す

は高昌城の跡。周囲約五キロ、盛時には三十万の人口があったといわれる高昌とウイグルの首都。なんとも広大な遺跡である。ひとけもない黄土の台地に風化に耐えて残る壁や城壁の多くは、もはや人工物とも自然物とも見分けがつかない。栄華の夢いまいず。ただ観光用のロバに牽かれた馬車ばかりが、

ガラガラと通り過ぎ、客相手しかすることもない風情の子供たちが、時に小うるさく纏い付き、時に遠巻きに笑顔で答える。十五年まえミューケナイヤサントリニ、クレタ島のマリアやカトリザクロスといったギリシアの遺跡を彷徨った頃の記憶が遠い太鼓の響きのように蘇る。

とにかく昼食の手打ちウドンと羊肉のソテーが気に入ってしまつて、老後はここで過ごすか、などとも考えるうちに、午後はバスで十五分ほどに位置する葡萄溝（フランス語ではVigne de Buge）に向かう。岩山に挟まれた一筋の水のほとりに発達したオアシスは葡萄の棚に覆われて緑の影のなかに憩っている。まことに地上の楽園を思わせる池の周囲にひとびとの日々の生活がある。ウイグルの女の子たちは本当にかわいらしくて、人一倍好奇心も強いのだが、何故か写真機を嗅ぎ付けて、レンズを向ける寸前にさつと姿を消してしまふのもかえってコケティッシュだ。船遊びの写真も、葡萄棚の写真も、結局人間不在の「無人楽園の情景」になつてしまふ。

この亭を借り切つてのセミナーだが、いやこの日は実に退屈だった。バオロ・ファツプリは実に誠実で博学な

学者なのだが、アラン・ル・ビションも同意したとおり、はっきりいうと記号学の犠牲者なのだ。西安でのフリオがそうしたときには批判したくせに、自分でも結局ひとりではそそそと一時間を占領し、おまけにその内容は中国の友人たちにはほぼ意味不明。話題は儀礼の比較を記号学的に検討する必要がある、というもので、それについては午前中にも高昌でしきりに叩き台を聞かされていたのだが、ますますキー・タムのメタ・ランガージュというのが中国語にならない。儀礼の規則の比較文化は結構だが、メタ・ランガージュによる *background* な学術的記述を行えば（これと *transcendent* との区別がまた哲学者ではない中国人歴史家たちにはまったく通用しない）、それで通文化的で普遍的な比較が可能だ、などと信ずるかれの楽観主義はいったいどこから生まれるのだろうか。

もうかれこれ一週間中国のインテリたちとつきあって来て、何がかれらに通用し、なにが無理かは当然悟つてしかるべき、と思つたのはやはり日本人の悪しき物分りの良さなのだろうか。

儀礼には *dominant transcendental* が必要とか要らないとか、*ritual* とはマリノフスキーによれば、苦惱をコントロール

する仕組みであるとか、精神分析も言うようにritualisticとは一種のオートマティスムによる形式化が許す抑圧と同時のdischargeであるとか、ritualとsymbol-icの差は前者がperformatifであるのに対して後者はそうではない、といった(カッシーラーの『象徴的なたちの哲学』や、それをうけたフルデューの象徴行為論「話すということ」などからみればまったく馬鹿げた)定義の提案とか、人間が発明した規則なのだから、ジャン・ピアティスタ・ヴィーコも言うように、その理解は人類である限り可能はずだ、とか。だがおおよそ問題はそんなところではなくて、これらの話という言葉が「礼」と訳されたときに、バオロの言わんとすることが中国人たちにはまったく理解不可能になることに

対する無理解にこそあるのだ。これではかつてキリスト教の神を天と訳してお互いに噛み合わせ神学論争を際限なく進めてしまったのとまったく同様の行き違いだ。脱キリスト教化してしまいい、なおかつ右か左かがいまだにインテリたちの分類に必須であるイタリアが、いかにキリスト教の思弁体系に捕らわれているかを知って、啞然たらざるを得ない。こうした硬直したéconomieの思考から抜け落ちるものこそフリオ

が第三のOccidentと呼んだ世界の真実の姿ではなかったのか、と思う。参加者たちひとりひとりの似顔絵を描きながら、

ようやく六時五十七分。通得や苦(とワープロが見事に通訳)のドミニックに順番が回る。そのコメントには、ここ二十年間中国で発生した事件を特権的な立場から観察してきた北京翻訳局務めの学究ならではの見識があった。まづ翻訳者の使命は翻訳困難なギャップをうまく具合に巧みに埋めてしまうかわりに、むしろそれを露呈するという自殺行為にあるのではないかと、我々の常識にメスを入れる。つぎに、西欧からの参加者への反論として曰く、皆さんはしきりに中国の近代化とかモダンとかポストモダンなどとおっしゃるが、一九二〇年代に日本のモダニズムに並行して発生したモダン以外はこの言葉は中国では全く理解不可能な言葉であることを確認しなければ、建設的な議論はこの先進地ようがない。

第三に、翻訳で何が発生しているかにもう少し西洋側、中国側双方とも理解を示していただきたい。いつだってほとんど翻訳不可能という部分をどうクリアーするかが通訳の本分ではあるけれども、日常の業務ではそこでや

むをえず犠牲になる切り捨ての要素こそが、実際にはかえって重要な場合も少なくはない。おまけに「礼」とritualの場合のように、必然的でも致命的なズレは常に存在するものであり、それに学者風の解説を付加していったとしても、それで閉じたスパイラルのように(真実の理解へと)漸次収束してゆくのか、それとも逆に、そうした努力が時間的にも、空間的にもかえって(複数の解へと)開かれた解放系をなして

いつてしまうのかは、早急には結論できない。どちらかとみなす判断は、それ自体ある一定の認識論的パラダイムに乗って下すはかない判断だが、その決定はすぐれて政治的な判断となるのだから、学者としてはあるいは判断を留保すべき問題かもしれない。

第二のコメントを依頼されていた姜教授からは、本日午後の議論がどの水準にたつた議論か把握したが、著しく理解困難だったことを正直に告げた上で、例えば中国の定義では礼は節である、といった常識を呈示された(「礼者節也」)。さて今度はこの「節」が訳できない。moderation、とやったものだから、今度はそれを前提にしてヨーロッパからの参加者のおしやべりはまたしてもあらぬ方へと暴走してしま

う。ようやく少し元気になってきたウンベルトが久々に口を挟み、一昨日来てでせた、exotisme、fascination、theorique、metaphysique、それにToquevilleの翻訳など、通訳がうまく機能しなかった用語の洗い直しを提案する。これに辞書学者のアラン・レイが口を挟み、用語対照表を作っただけでは無意味だろうと反論したが、むろんウンベルトもその点は承知のうえだ。ドミニックが経験に立脚して語ったとおり、それぞれの文化圏での意味の網の目に必要な目配りをせずにも、もっぱら翻訳をたよりに議論をすると、話が頓珍漢のまま迷路にさまよいこむぞ、というのがウンベルトの警告の主旨である。そうした比較考察の先例として、ル・ゴフ教授は

Naubert EliasのZur Prozess der Zivilisation (1936)を参考にしては、とまっとうな提案をする。

支離滅裂の議論の締めくくりには、蔡教授が「知異求同」という言葉を持ち出して来て、ちんぷんかんぷんに陥った一座の締めをなさった。だが、この標語こそいかに中国ならではの融和思想の現れのように見えて、あまり好きにはなれなかった。むしろ本日の午後に発生したのは「求同知異」という、はなはだ反ヴィーコのゆえに貴重な事

態ではなかったのか。徒労感に似た充実感とともに、外に出ると、谷合のオアシスには早くも夕闇が迫り、なんだかせつかくの好天を無駄にしたようなやるせなさに苛まれる。この夜の記憶定かならず。

6/15

早朝バスにてウルムチ(烏魯木齊)にむけ出発。

最初の予定では途中ボゴダ山脈の主峰博格達(海拔五四四五メートル)中腹にある天池や、南山牧場に立ち寄り、ウルムチよりさらに西の旧ソ連国境付近まで行くことになっていたのだが、いずれも北京での会合の日取りの都合で時間不足となり中止。横目で雪を戴いた山々を見過し、途中、白楊河のすこし手前の時で小休止したのみ。それでも両側から迫る峨々たる岩山に挟まれた谷間と、真つ青な空の色を映して流れる急流にそつた一筋の緑のたたずまいは、全行程中最高の風景だった。例によつてジャンルイとふたりして石ころの散在する岩山を駆け上がり、眼科遥かにカメラを向ける。何分と登らずして路上のバスは頑具のように小さくなる。強い日光に似合わない冷めんやりとした大気を胸いっぱい吸い込んで、

旅程を再開する。途中、長距離列車を追いつき、風力発電の巨大なプロペラ群を見たりするうちに、早くも昼前にはウルムチの町に到着し、昼どきの交通渋滞真つ最中に巻き込まれる。もつと途中でノンビリ道草をすべきだったのだ。

宿は去年落成したばかりというホリデイ・イン、新疆假日大酒店。もちろん中外合弁事業の産物で、一泊八〇〇USドルといつてんでもない代物。威圧的に聳える高層の客室の窓から下を眺めると、あたりには再開発の爪痕を生々しい。ヨーロッパからのお客たちには、これで行く文明世界へ帰還を果たした安心感を植え付け、また中国の参加者たちには東の間の豪華を提供しようとの配慮なのだろうが、周囲とはまったく不調和なホテルの金メッキの見てくれが第一印象からして好きにならない。アラン・ル・ビションに文句を言うが返事は *Qu'est-ce que je fais ?*、それで一体どうしろっていうんだい。麗々しき服装の闇の両替がホテルのロビーにも半ば公認といった態度でうようよしていて、結構上手な英語で冗談まじりに交渉を持ちかけに来る。さすがにホテルは敬遠して別棟の食堂での昼食となるが(これも美味)、ホテ

ル飯に食傷気味というより、そろそろ中華にうんざりしてヨーロッパ・スタイルが恋しいらしいヨーロッパ勢はほとんど現れず。

その後、アラン・レイ、ジャンルイと市場見物。西域至るところで路上ビリヤードが大流行なのは一種の奇観であるが、ウルムチはそのメッカといった面持ち。歩道という歩道には所せましとビリヤードの台が立ち並び、真つ昼間から大勢の男たちが壮若を問わずうち興じている。そういえば、西安のホテルでは、英語しかしゃべれない風情の中国系アメリカ三世代らしい若者グループがビリヤード台を占拠して喧噪かまびすしかった、トゥルファンでも兵隊さんが昼間から葡萄樹の横で研究に余念ない様子だった、などと思いついていううちに、ジャンルイが例の調子で無遠慮にカメラを向け、アンチャン風とのあいだにひと悶着持ち上がる。広州の経済特区も顔負けといった有り様で急速に豊かになっている新疆ウイグル自治区区都の都市生活と、それにともなう健全とも不健全ともつかぬ遊業の盛行と。夕刻にも、この一番好奇心の強いメンバー三人で連れ立って、人民劇場から南の回族街のバザールを冷やかしに出掛けたが、市場の熱気と販

わいは吐魯番よりもさらになおいつそう下町風で濃密だ。石炭と、石炭酸と羊の肉の焦げる匂いとながなまぜになつて押し寄せてくる。表通りに戻ると歓楽街には裸電球の下のビリアードと並んで、至るところにどぎつい原色で音楽O.A.歌舞厅の看板が出ている。午後早くには新疆ウイグル自治区博物館を公式に訪れたが、唯物史観歴史教育用のロシア式大建築、片隅に「ローランの美女」のミイラが無造作に転がっているあの死んだような陰鬱で閑散とした荒廃をすら路感させる雰囲気と、至るところで道路拡張工事の真つ最中という新市街の活気との落差には戸惑うばかりだ。

午後のセッションは会議室予約に手間取った。外国人料金で支払ったのは、とても懐がもたないもので、中国側の主催という名目で一階の談話室を借りるが、六時三〇分開始で七時二〇分には次ぎの会議が入るとのこと。これが中国共産党要人のご臨席を賜るとかで、鼎の軽重を問われ自尊心を傷つけられた中山大責任者の胡守為教授は王賓に食つてかかるが、これは少々文句を言う相手がお門違い。時間オーバーには神経質な日本人を司会に据えるのが良からうというわけか、小生司

会のもので、東西革命観の比較。一昨年中国各地でもミッシェル・ボヴェール、フランソワ・フュレ、マドレーヌ・リペリオ、フランソワ・グーチエなどを招いて開催されたフランス大革命をめぐるいくつかの会議に出席してきた劉文立が中国語とフランス語で中国の革命観の変遷を手際よく要約。ついで、『革命——ある語彙の歴史』を著したアラ・レイが補足。フリオ・コロンボが質問を始めたが、その途中でもう持ち時間が切れた。

かいつまんで要約しておこう。法国大革命のことが中国に知られるようになったのは一八六〇年代の「*Mao Tsu*」王韜らをもって嚆矢とするが、当時にあつては、むしろ醜い出来事として批判的に評価される場合が多かった。康有为ら改革派の場合にも、日本の王政復古は肯定的に評価するのに対し、フランス型の革命は悪しき前例としてこれに警戒する姿勢が基本であつて、その後の孫文ら革命派の見解とはいうまでもなく対立している。つぎに歴史研究の立場から見れば、第一次大戦後、楊人驥、沈鍊之の手で日本語からの重訳によるジョレス、ミシュレなど「左翼系」の歴史書が中心に翻訳され、中国に根付く。ついで四九年の革命後は、

ロシアの一九一七年一月革命との比較において大革命の評価が下される傾向が顕著となる。つまりテルミドール反動をもつて革命は終焉した、とする見解が支配的となり、ナポレオンも反革命の徒と見なされる。このように過去の事象を現在の状況の説明に援用する「影射史学」の傾向は文化大革命下においても顕著であり、いわゆる王党派によるテロが頻発した白色恐怖時代に模して、「王党派」のレッテル貼りによる反革命派狩りが遂行されたり、一九七〇年以後の儒教圧迫に対して周恩来のとつた態度が民法典を發布したナポレオンの復権と比較されたり、鄭小平による一九七五年の方向修正が極左からは「王政復古」と揶揄され、鄭はバリ・コミューンを圧殺したティエールにも対比されるなどの例がある。

この要約からアラ・レイが、*histoire d'utilisation de l'histoire*、つまり歴史がいかに利用されたかの歴史の可能性を示唆し、稲賀は *Hayden White's Metahistory* にそうした歴史の神話作用解明の一例を指摘した。さらにレイは逆の例としてフランスにおける毛沢東神話に言及し、ヨーロッパ人が見た中国の歴史に関する歴史研究の必要を主張した。稲賀は歴史記述の様式と文体そのものが、

むしろ書き手やその時代の価値観の映し鏡となることには、ピーター・ゲイやミッシェル・ド・セルトー、ポール・ヴェーヌらによつて既に認識論的に検討が加えられていることを確認し、またレイの指摘した、中国の革命観がイエズス会士の手で西欧に伝えられて利用された経緯とは反対に、厳復（*Yen Fook*）など中村正直ほかを介して日本語から中文に「自由論」などを翻訳した折りに「革命」といった概念にいかなる屈曲がはいりこんだかに関する研究が日本にはあることに言及した。

か。ホテルの外にまで響き渡る大騒音には辟易だが、ほかに場所もない。王賓そのほか若い連中で連れ立つて入ってみると、飲み物の料金はもちろん常軌を逸しているし、ウエイトレスの女の子たちも客にお金を使わせる術をきちんと心得ていて、かつての社会主義時代の「服務してやつて」といった尊大な態度もはやどこにも存在しない。お客のなかには、いきなりいって身なりこそきちんとしているが、いかがい顔付きの商売人がちらほら見える。表通りには数え切れぬほどの台数の高級外車が、香港顔負けにつきつきと行き交う。この軽薄にして重量感ある物質的繁栄ぶりはいったい何事ならんと、訝しむこそしきりであつた。

一昨年京都で開かれた、国際シンポジウム「誤解と創造性」での西川長夫、ケイト・ナカイ、王克非氏ほかの研究を念頭に置いた発言である。さらにイスラームにおける革命思想との比較の必要も説かれて、山内昌之氏などの研究の国際的意義があらためて痛感された。いずれにせよこの日の明晰な発言で劉文立はすいぶんとお株を上げた。

翌朝一番の便で北京に飛びあつて、夜遊びも控える。ロビー奥のバーは夜ともなるとフィリピン産らしく見事な英語で歌うブローの女の子たちのバンドが入り、巨大なロビー一杯に鳴り響く大音響の生演奏が始まる。これが美国流とても誤解されているのだろう

6/16

午前八時五十分離陸。
ウズベクの国旗をつけた新羅航空のソ連製ツポレフの大型機。チャーター機とのことで名称は未確認だが天井が機に高く、空気噴出口がひとつひとつ前の座席の端っこについているという不思議な旅客機である。北京までの飛行時間は三時間十分ほど。ようやく前半の旅を終え、本日午後から後半戦。研究会のほかに、

公開討論会や大使館でのレセプション、ディナーなど、多忙な公式日程の消化が行く手に待っている。

一二時三三分、北京空港着。イタリア大使 Paterno 夫妻、フランス大使 Claude Martin 氏および文化アタッシェ Jean-Claude Thivolle らの出迎え。こういうのは苦手だし、こっちはお呼びではないからと勝手に決めて裏手に隠れてこそそそしていたが、とっ捕まって首実検。荷物のビックアップに手間取り、二時すぎにようやくバスに乗り、常ながら渋滞のひどい二車線の並木道をのろのろと辿って、至る所、九六年オリシピック誘致の広告の中北京市北西の外れ、外国人宿泊施設として有名な友誼賓館に至る。午後の記憶がない。記録もない。午後六時より、ネクタイ着用のおえイタリア大使館文化部に参上してのディナーを命じられたのはやっぱりこの日だったろうか。大使夫人マダム・パレルモはエジプト出身。アラビア語、イタリア語はもちろん、フランス語、英語、中国語をこなすたいへんインテリ女性。大使館の内装や装飾品もすべて彼女の品定め。とうてい普通には買えない宝物や文化財の数々が、外交特権の「入貢」ならぬ物貴としてそれは見事に飾られて、所を得た

ように生きづいている。やっぱり住む世界が違いますね。

食事はごく普通の平凡なイタリア料理にワインをちょっぴり。舞台装置こそ完全に映画の世界だが、料理の質に比べて給仕が大袈裟すぎる。暑いなかを白い上着でびっちり正装した中国人の給仕さんを見ると、やっぱり植民地、という感慨がわく。とにかく横飯中は、救いがたく軽薄な上流社会風のおしゃべりには迷惑ならぬ程度に付き合ひ、普段とはうってかわって上品そうなフランス語をついで操ってみせ、それ以上には目立たぬように自然(そと)に振る舞う、というのも案でない。駄目な日本人の見本。中国からは年配組は差し置いて、言葉のできる若手の王賓と劉文立のみの参加だが、いささかも應ずるところなく好奇心を發揮しつつ、即座にその場に溶け込む貴公子ぶりはほんとと感心する。いかげん退屈してうんざりしている当方を尻目に、ジャンルイなどは早々にブラジルに滞在していたとかいうお嬢さんを掴まえて、ほどなく意気投合。この差が日本を世界の孤児にする。

6/17

午前中は、本日で広州に戻る予定の中山大学

関係者との最終討論会。広州のひとつ、ちはどうも北京では勝手が違うようで、またまた部屋の確保に手間取った末、ホテル裏手の冷房もない老朽木造建築に会場を設営。姜伯勳さんがこれまでの行程を見事に総合する報告をまとめられ、あらためてかれの力量を思い知らされる。曰く、ル・ゴフ教授、レイ教授も強調されたとおり、すべての歴史は現代史であることを免れないし(とはいえ中国ではその傾向が強すぎるのも否定できないが、またそうであればこそはじめて我々の討論も意味をもつ。そのなかで注意すべきはエーコ教授が最初に提唱された *a peu près*、つまり「おおその同意と細部の食い違い」の脈絡であって、そこに修辭学と翻訳の問題の核心がある。稲賀の言及した「己所勿欲、勿施於人」とイエズスの教えとの差などはその一例であるが、そうした誤差との関数において、その背後にある、ダンシャン教授が西安で問題にした思考の枠組みの食い違いや、ファブリー教授が取り上げた儀礼の機能に関する議論を進展させることが、ル・ビション教授が基調に掲げた、他

者への眼差しの交差における「普通と誤解」の表裏の文彩に体系的な学的反省を施すための出発点となるだろう。相互理解にからまる全体の調和とマイノリティのアイデンティティとの力関係はマストリツチ条約批准問題でも、透かし模様細工(これは劉の巧みなフランス語訳からの直訳)を眺めるように見て取れるが、中国の将来もこれと無関係ではない。おそらくだからこそ「第三の欧州」は現在の地球に生きる我々ひとりひとりの問題であり、そこに要請されるのが、今回のような跨文化的視点に立った異文化理解の可能性の探求であり、それは必然的に異文化理解の在り方そのものの文化的な差異に関する相互理解を深め、その中で得られた知見を互いに共有してゆくことから始められなければならないであろう。

これを受けた蔡先生は、具体的な事物の観察から出発しなければならぬ、との持論に則り、テンプル・マナーの礼儀 *etiquette* を例にとる。以下は蔡先生の発言の要約というよりは当方の疑念だが、まだたくさん御馳走が残っているのに、もうありません、という中国の礼法は *hypocrite* なのか *hospitable* ののか(そもそも両者は表裏一体ではない

のか)。ホストが料理を客に分ける *Parage/companionship* の原則をそのまま生かした中国式の配膳に比べて、個々人の皿が厳格に区別される文化圏で *convivialité* はいかなる礼節 *etiquette* の原則に貫かれているのか。親子関係を拡大家族の原理へ、さらには人類全体へと拡大してゆく「四海兄弟」の観念は（これこそ理想という、蔡先生のいささか楽天的なお説とは違って）、個人の尊重 *individualisme* と家族の絆 *attachement*（つまり家父長主義）の狭間にあって、覇権主義なのかそれとも健全なモデルなのか。

これまで個物を語ることに徹してこられた蔡先生は、どうやら一種の文化比較類型学に裏打ちされた相対主義的思考を確立されつつあるように見受けた。もともと、試しに挿入してみただけの文字からも推察されるように、これらの問題はリソン・トロサナ教授の指摘をまっぴらでもなく、宗教学、民族学、人類学、社会学などの領域ですでに組織的な検討の加えられている問題でもあって、ここから先はどうやら思い付きの直観と素朴実証主義的な実物尊重文献学だけではもはやとても対処しきれないようだ。学者言葉で申し訳ないが、司会のアントワヌも言うように、

「具体事象と理論との相互作用、その両面の主観的な関係が模索されなければならない」のだ。

蔡先生を受けて家族観の比較研究を提唱したのはル・ゴフ教授だが、このアナル学派第三世代の中心人物、二言目には「長期持続の輩」 *patrimoine de la longue durée* を公言しながら、そのくせ事あるごとに *histoire événementielle* の教養を思わず漏らしてしまふ世代の人で、ナポレオン三世とニコライ一世が互いに兄弟 *frères* と呼ぶより友 *amis* と呼びあうことを好んだ故事を引き、ヨーロッパでは中世以来血縁はでっぴあげ *de par et d'autre* でも精神的な家族 *famille spirituelle* を重視する、制度化された伝統のあつたことを喚起した。また個人と社会について、劉文立は、人権 *droit de l'homme* というとき欧州では個人のことを考えるが、中国語では「人」とは *individu* を指すものではないことを、先ほどの家族観ともからめて説明し、さらに胡先生から死刑廃止問題についても、香港では過半数が廃止賛成なのに広州ではそれでは社会に危害が及ぶとして、大多数の人々は廃止に反対であるという統計結果を引かれ、単なる政治思想の比較や倫理的善悪の判断にとどまらぬ、社会の意識構造分析の必

要を説いた。

バオロ・ファツプリは、こうした争点を巡って、似ているけれど違っている耐えられない異文化の社会儀礼にこんな *ethnologie* の奇形学を提唱したが、ここでも典型と奇形の分類整理よりもそれこそ覇権主義による形質人類学博物館的な発想で、分類を拒絶して擦り抜ける部分に照明を当ることで、分類作業そのものを機能不全に陥れ、安定した知識の蓄積を前提とする共同体の成立を無効に陥れる工夫が必要ではなからうか。自己破壊による自己更新。自己嘲笑は外向きに開かれたカラツとしたユーモアになるが、他者罵倒は内輪に閉じた陰湿なサタイヤである。奇形学に求めらるるのはユーモアであり、離れの見だらう。

比較文化なるものが文部省の肝入りでお盛んな日本では、いまさら儀礼の類型学もあるまいが、意見が対立して物別れになるとフランス人ならあとはもうお互い口もきかないが、イタリア人はそのあと平気でいつしよに食事をし、中国人は交渉の席ではいつも礼儀ただし *etiquette* を尊重して対立を避けるながら、腹の底に本音を隠しておいて、いずれ仕返しをして相手の政治生命を断つという。そんな頭脳戦に身を

晒すこともせず、我かんぜずと傍から高みの見物を決め込んで、文化とは偽善のことと見付けたら、などと評論家気取りで嘯いていたのが、さしずめ国際関係における「狭い」エコノミック・アニマル日本人の役回りでもあったらうか。だが、もはやいつまでも、そんな漁夫の利を漁りつづける方便の「比較文化論」に安住することは許されまい。

そうした化かし合いのゲームを、ゲームの規則にも通じないままに演じている我々自身の方法論の欠如を批判する声があがったのに応えたのがウンベルト・エーコだった。（一）現実を見る目が文化の基礎となるが、とりわけ人文学、人類学は、（二）ある文化圏のものの方を異なる文化圏（西欧）の目をといて見るというメタ・レヴェルの文化である。（三）そのことを自覚させて、この観察と被観察の関係を転倒させてみたのが一九九一年のボローニャの学会だった。つまり西欧の文化を見る目を非西欧の目から観察しなおしたわけだ。（四）今回の広東・北京学会では（一）（二）の両者を同時に衝突させることで、ようやく正面からの視線の交差がメタ・レヴェルでセッティングされたわけであって、そこでは常なる自

己の再解釈と翻訳とが要請される。これこそ立派な新たな方法論の創出でなくて何であらうか、というわけだ。

最後を纏めるにあたって、胡考為先生が、孔子の「丘也東南西北之人也」を引いて、孔子からRogに至る「有孝文無類」の境地を跨文化研究の心得として論じられた。孔子の古来の教えに戻ることこそが現代であるというのは、

中国の最近の思潮を彷彿とさせる復古主義にはかなるまいが、中華のともすれば自己中心で排外的な教条が、その原点においてル・ゴッフ教授お得意のaventureの契機を孕んでいたとなれば、それはそれで悪くはあるまい。

当方も司会のアントワニスからあらかじめ発言を求められており、それなりに発言すべき腹案はあったのだが、時間不足で果たせず。なぜ黙っていたと王賓から咎められる。

京澳大酒店で中山大学の面々とお別れの宴。もちろんベキンダックだが、ご存じのとおりこれにはえらく時間がかかる。午前の部の議論が順調に遅延したため、午後講演会のあるイタリア勢はやくも時間のやり繰りがつかなくなって大使館随員たちがソワソワしている。広州側とイタリア大使館それぞれ的主催者の面子もあって、舞台裏は

大いに紛糾したのだが、その件には深入りするまい。講演会出席の王賓と劉文立（かれはかつて北京大学にいた関係で当地にも友人多数がある）だけを残り、他の参加者とは後日マカオでの再会を期す。

*

午後は市内、長城賓館シエラトン・ホテルのおそろしく豪華な大広間を会場に、意大利駐華大使館文化部主任講演会「《現在》思想在后工業化的欧州和在当代中国」である。演壇には王賓、フリオ・コロンボ、ウンベルト・エーコ、マルタン・フランソ大使、パレルモ・イタリア大使夫人、アラン・ル・ビション、湯一介、北京北京大学哲学教授、パオロ・ファブリー、楽黛云、Yu De-si 女史北京大学比較文学教授。この鳴り物入りの講演会および大レセプションについては別に公表もされようから省略して、ただ二点だけ触れておく。まず湯先生の談話。一九世紀末の中西西用のスローガンは五四運動の頃には西体西用にまでなったが、李沢厚は西体中用を唱えた。今日では自由を体に民主主義を用とするのも可ではないか、などといった、論理学の練習に体を繕った政治的意志表明。そのあまりのラディカルな論法（即、内

容だが、これは天安門以降の現在の北京では、なお極度に特権的な一部の知識人のみに許容されたスタンド・プレーなのだ、あとから王賓に教ええられる）に通訳がしばし思わず絶句し、中国、欧米人含めて四百人はあった聴衆から歓声と拍手があがった。いまひとつは王賓の談話。普通話が必要ずしも完璧ではなく、また筋が飛躍する嫌いもある王賓だが、我々が旅行のあいだに遭遇した文化間の誤解をユーモアたっぷりに物語るその自由自在のおしやべりは、北京にあつてはかなりぶしつけな発言もあつたらしくて（内容不祥）一部で批判を被りながらも、かれを一躍人気者にした。後日小生はなぜか王賓と人違いされて、握手を求められたり褒められたりして面食らったりもした、ということだけ書き留めて、当方の感想に移りたい。

まずイタリアの北京における文化活動の華々しさである。経済や政治も背景にちろつかせながら、露骨なイタリアの宣伝は極力控えたまま、これだけの聴衆を動員する底力。それには、かなりの規模の予算だけではなく、やはり司会を務めたパレルモ夫人のような実力者が文化センターで縦横に活躍できる環境が必要だろう。内部の実態は

知らぬことだから詮索しないが、イタリアの存在をいやがうえにも印象づける点では、残念ながら東京のイタリア文化会館は到底北京の同僚の敵ではあるまい。ましていわんや、これに匹敵するだけの事業を、日本の外務省や大学教授たちは企画出来るだろうか。これまた実態には無知だから憶測でものを言つては叱られようが、たしかなことは、日本の伝統的な哲史文の中国専門家は、現代中国の知識人と「西欧」を論ずる立場にはないことである。逆に日本の西欧研究者も中国までいって西欧を論ずることは多くはあるまい。一番必要とされているはずの分野で、文化・学術交流の需要に応じ得る人材がすっぱりと抜け落ちていく。若手の現代中国研究者でこうした場の開発に尽くしておられる方があれば、ぜひそのお話を伺いたいものだ。

レセプションでは、演壇にあがつた知人たちは応対に忙しく、当方はほかに誰も知ったひともない。論理的帰結として自己疎外に沈みこみ、来るんじゃないかと思つてしきり。そんな小生を見付けた王賓は、こういうところが中国人の大人たる所以であろうが、黙っておれについて来いと誘ってくれるが、まさか発表者でもないのに、招

待状もなくのこの大使館のお呼ばれについて行くわけにも参るまい。劉が友人たちと乗合タクシー（日本と合弁らしい黄色のミニ・バンが大量に走っている）で帰るというので、便乗させてもらう。

夜ようやく暇になったので、北京外語学院の嚴安生先生に電話してみると、幸いお暇とのこと。すぐ近くのの良いことに、ホテルまでお出でいただく。ハーヴァード大学だかのロゴの入ったシャツ一枚という気楽な格好で歩いていらつしやる。出稼ぎの屋台が延々と並び、裸電球の下で人々が雑踏している歩道をつたい、そのはずれあたりのとある露店のひとつに入り、最近はやりの生ビールと山のような料理の御馳走にあづかる。昨年近代中国人の『日本留学精神史』で大佛次郎賞、太平洋学術奨励賞を受賞されたその席でお会いして以来一年ぶりの再会だが、北京でお会いしましょうというのはもう十年越しのお約束。ゲンさんならではの見事で味わい豊かな日本語——そういうえば日本語ももう二週間ぶりである——に聞き惚れながら、共通の師匠たちの噂、最近の研究の動向、政治情勢の分析など、積もる話はいつまでも尽きない。例によって辛辣で鋭いけれ

ど暖かく、その姿が彷彿とするような人物評も見事だし、そしてなにより誰ちゃんはもうすぐお母さん、彼氏は今度再婚した、あいつはどこに就職予定といった、当方のまったく知らない東京の同僚たちの近況にちゃんと同じでおられるのには、参った。イナガさん、ちよっと田舎はけだよ。とからかわれる。なんでもひっきりなしに日本からお客があつて、ご自身も北京、東京、京都と行ったり来りの生活らしい。七九年に初めて日本にいらしたときにはご自身でも空想だにできなかった環境の変貌ぶりであり、それに伴うご自身の身分の社会的地位の劇的な向上である。

6/18

La Locomotive et le Dragon
「独角獣と龍」——在尋

找中西文化普遍性中の誤読——国際検討会。九時に北京大学の検問つきの門をくぐって、標記の学会開催式に臨む。三階の大階段教室のひな壇には、左から作家として有名な王蒙、湯一介教授、李漢林老師、吠樹青學長、樂黛雲教授（司会）、ウンベルト・エーコ、アラン・ル・ビション、沈大力教授。緑の下の力もちは、もっぱらフランス文学・比

較文学の孟華夫人の仕事。例によって次々と出来る問題をてきぱきとさばいてゆく孟夫人の才能には驚嘆した。文化のあいだの誤解とはようするに片思いの愛情みたいなもので、自分の文化に対するコンプレックスと相手の理想視との落差が交流の可能性でもあれば、擦れ違いの温床ともなる、といった文化交流の心理学を説いた王蒙はじめ、なかなかおもしろい談話もあったのだが、小生はおおせつかったいろいろ雑用を処理せねばならぬ立場になったため、残念ながらこの部分のノートが残っていない。

つづく基調講演はウンベルト・エーコによる「*They looked for Unicorns*」と湯一介による「*是、非のあいだ——文化の間に長城は必要か*」のふたつ。当代の東西文化を代表する一級の知識人といつてもけつて誇張ではないこのふたりの講演が、結局我々の行程の要をなすものであったことは否定できまい。エーコの英文による発表は、コレージュ・ド・フランスでの連続講演の要約であり、かれの次ぎに出版される著作『普遍言語の追求』のなかから、中国に関する部分を今回の会議の主旨に沿ってまとめ直したものであった（以下の要約はすでに同書の日本語訳が『完全言

語の探究』上村忠男・廣石正和訳、平凡社として出版された今日では出し遅れだが、執筆当時のまま掲載する。一九九五年追記。

未知のものに直面したとき、ひとはそれを既知のコードなり知識なりに沿って理解しようとする。ユニコーンの場合もその一例で、中世文学で培われた、プレスター・ジョンの国に住まうはずのユニコーンをマルコ・ポーロはジャワで見付けたわけだが、それは肢体も角も白ではなくて黒く、足は駿馬のそれとはおどろきの象の足、鬣はバッファローのごとく（とエーコの原文にあるが、バッファローは当時知られていたのかしら）、顔は蛇のボアの如くであった。まちがいがなくこれは *chimera* だったのだらう（朝になって英文をチェックした、あの屈指の英語使いであり、ポロニア留学のまな弟子王賓がボアもリノセロスも知らず、これにはセツカクの冗談を仕込んでおいたエーコも咄然として慌てる。以上が話の枕。同じようなことが言語を巡っても発生する。漢字は音を表すのではなく直接に事物さらには考えを表す、という知見は Gaspar de Cruz (1569) から Juan Caramazza de Mendoza (1585) へと伝えられ、とりわけ中国人や日本人が言語を

異にしながら、漢字ゆえにお互いに意
志疎通できることは一六二五年に出版
された Matteo Ricci の日誌を経て、John
Wilkins (*Mercury* (1641)) などにより、
ヨーロッパ知識人共有の知識となつて
いった。「普通文字」の構想は Francis
 Bacon (1623) に源をもつが、異端の思
想家 Isaac de La Peyrère はそれをアダムの
言語よりもさらに遡る中国に求め、ま
た John Webb のようにノアの方舟が到着
したアララト山は実はシナだったとの
説をなすものも現れる (1699)。Athar-
vash Kirtana の *China Illustrata* (1667) は、
うした時代の産物だが、その背後には
Oedipus Aegyptiacus に論ぜられた、エジ
プトにすべての文明の起源を見、中国
の知恵はノアの息子 Chan に由来すると
考える神秘主義的な信念があった。孔
子に中国版 *Plato's Timaeus* を見るキ
ルヒヤーは、また漢字をエジプトのヒ
エログリフの墮落した形態と認識した。
キルヒヤーに拠れば、リッチやアダム・
シャール の中国での布教の意味は中国
人に自分たちの文化が神秘の源泉エジ
プトの墮落形態であることを納得させ
るにあった、ということになる。シャール
による暦法改正の試みもその一環と
して理解できよう。その裏には、中国
もまたたんなる野蛮人ではなく共通の

起源をもちながら放浪した放蕩息子と
して、いまや西欧の庇護の下に入るべ
きだ、というレオポルド一世——キル
ヒヤーの庇護者——の政治的意向すら
顔を覗かせているようだ。

最後に Leibniz の論理学における普通
志向と、Johann Bouvet によつてかれに
伝えられた中国易经の八卦の關係を考
えよう。ライプニッツの二進法はその
形而上学的背景として神と無との弁証
法をもつていたが、ブーヴェ神父の教
えた卜筮の八卦は八角形ではなく左か
ら右へと展開して並べられていて、そ
れゆえかつて好都合 (つ) にも、ライ
プニッツには自分の形式的微積分学の
普遍性を証するものと理解された。
かれは八卦の創始者とされる万能の発
明家 王伏羲 様 のうちに、またしてもヘ
ルメースの姿を見いだしたのだ。

こうしたキルヒヤーとライプニッツ
の *correspondence* (勘違いによる発見) には、
しかし他者を理解することと自我を同
一視することとの短絡がある。人類学
も教えることと、他者を知るとはその
差異を知りその違いを尊重するにある
(「稲賀脇白つまりやつぱり」[「異求同」
では困るのだ]。我々西欧人はしたがっ
て中国に一角獣を探しにきたのではな
く、あくまでこの龍の国を知るために

来たのである。——という末尾はいさ
さか取つて付けた結末だったが、さす
がエーコと思わせるだけの堂々たる展
開。もつともフランス語畑の参加者が
中心だった中国側に通訳なしではたし
てどこまで理解されたのか。冗談に反
応するのも中国側では楽夫人ぐらいい
いささか心もとなかった。

それにしても、当方としてはウンペ
ルトとどこまでお互いの関心が近かつ
たとは知らなかった。それでつい、日本
における倒立した普通言語追求の夢の
場合として、いささか竹内信夫先生の
受け売りだが (*「空海と悉曇」*、『比較文
学研究』五六号、一九八九年、空海の
サンスクリット研究における神秘主義
的言語学がやがて和歌陀羅尼論に発展
し、加茂真淵の五〇音言魂説へと至つ
た経緯や、また韓国では類似したハン
グル普通言語の説があることなども、
この日の午後バスで移動中にエーコと
雑談ながら話す機会を持てた。すべて
の言語をそれに翻訳できるが、ひとた
びそれに翻訳されたものはや二度
といかなる言語にも翻訳できない、と
いうマラウイ語の神話にまつわる冗談
も含め——そしてそれは翻訳天国日本
で実際に進行している事態なのだが——
一刻の愉快な交換だった。しかし

だからといっていまさらエーコが次ぎ
の著作に新たに一章を書き加えるには、
すでに手遅れである。所詮は東洋の側
からのエーコへの *secondplay* だったのか
もしれないが。

さて、エーコのライプニッツへの言
及はあるいは湯一介教授へのエールだ
ったのかもしれない。というのも湯教
授の話は、不是、不是未有、非有非無、
非実非虚といった論理操作を応用し
て、境界でもなければ境界の不在でも
ない、通常Ⅱ連続でもなければ、非
常Ⅱ非連続でもない、外部への攻撃で
もなければ不在の伝統でもない、など
など否定の累積によつて肯定を表現
する中国哲学の演習に名を借りて、通
常の思考の境界Ⅱ限界を越えようとし
るものだったからだ。西欧哲学との接
点を探せば、イデアとしての円にして
も本当は非在のはずの線でその外延を
示さなければその実在を示すことはで
きない。また烘雲托月というように、
周りを墨で塗り潰して月や雪をいわば
虚に描く技法が中国絵画には存在す
る。文化の間の理解に以上の演習を応
用すれば非誤読、非非誤読といった操
作が可能で、対話の可能性とは誤解の
可能性と表裏一体だ。以下核心と思し
きところを湯教授の当日の手稿から引

用する（翻訳には、三重大学の道坂昭廣氏の助力を仰いだが、とりわけ前半は小生の当日の筆写の誤りも少なくなくて、なお意味不明の箇所が残る。この点、平にお詫び申し上げる。

「所謂（非誤説）は説くことは根底原文の問題來說の（所謂非誤説）は説くは異なる文化背景下と介入の創造力而説的。如果在文化之間不存在（誤説）問題、那么就沒有不同的文化之間の會話、或者說不同文化之間の對話的必要性就不存在了。正因為有（誤説）（即（非誤説））才可能有不同理解、有不同見解才形成對話。正因為有（非誤説）、才能有共同討論的論題、有共同討論的論題也才有可能形成對話」當日の草稿より。「いわゆる（非誤説）は要するに原文に基づく問題として話される。いわゆる（非誤説）は異なる文化の背景の元で、介入してくる創造力として説明される。もし文化のあいだに（誤説）の問題が存在しないなら、異なる文化の間の對話はない、あるいは、異なる文化の間の對話の必要性は存在しなくなるといえる。まさに（誤説）（つまり（非誤説））があるから、ようやく異なった見解をもつことができるのであり、異なった見解があるから、ようやく對話が形成されるのである。

る。まさに（非誤説）があるから、ようやく共同の討論の論題をもつことができるのであり、共同の討論の論題があつてまた、ようやく對話が形成される可能性があるのである」（道坂助教授訳）。

このあたりからあとは中国語の原文で示さないと無理なようで、なかなか有能な通訳でフランス語使いの丁一凡も訳しあぐね、マイクの調子も今一つで不鮮明。欧州勢はこのあたりで痺れを切らす。どうやら二重否定を弄ぶくらい西欧でもできる、といった水準でそつばを向かれてしまったらしい。これは日本の倫理学もかかえる問題だが、中国固有の哲学に興味を示すのは西欧ではオリエンタリストたち、シノログたちだけであり、しかもかれらの多くは古典学研究を専門としていて、現代中国哲学にはあまり関心がない。逆に中国や日本の西欧哲学研究が西欧の本場で認められるためには、中国や日本の固有性は一端括弧に入れることとなるが、これは一般に西欧の哲学研究者にも中国研究者にも無関係な領域となる。まさにこうした二重否定が三重に重なって、現代中国哲学と現代西欧哲学との對話は信じがたいほど困難になる。そうしたなかで、英文でも幾つか著

作があり（例えば Confucianism, Buddhism, Daoism, Christianity and Chinese Culture, The University of Peking, 1994-5）恵存いただいた「その後日本語でも出版された夫人の『チャイニーズ・オデッセイ』（岩波書店）ではや影がうすいものの、不屈の人権派としての苦難の半生が合州国の学会などでは比較的にまで高い湯一介教授にして、国内では多大の反響を呼ぶ論法が、なお国外で自由自在に通用するとはとても参らないのだ。

*

昼食は北京大学食堂の勺園 Shao Yuan 貴賓室にて北京大学側の歓迎レセプション。今まで愚痴ひとつこぼさず超人的な牽引役を一手に引き受けていた病氣知らずの王賓が、青い顔をして、食事に手をつけない。胃をやられた様子立場上舞台裏で対立せざるをえなかった孟夫人がしきりに気遣う。幸いちょうど受け入れ側が北京大学にバトン・タッチされたのを受けて（という口実の下に）、ホテルで数日間完全休養してもらふことになる。主演俳優と裏方とマネージャーと渉外係と秘書と通訳と事故処理班を同時にこなしては、とてもでないが体がもつはずもない。そ

れに北京では王賓ほかの在京中山大学関係者だけでは責任の取れない、複雑な外交交渉が加わっていた。誇り高い本人はさすがにそんなことおくびにも漏らさぬが、水面下には解決不可能な難題も絡まって、もう臨界状態だったのだ。

午後には猛暑のなかをまづ円明宮跡見学。カステイリオーネらの設計になるバロック式庭園の中国へ移入と、一八六〇年、第二次アヘン戦争における英仏軍の略奪行為に思いを馳せる。つづいて道教寺院白雲館を訪れると、西欧の参加者たちもそれと知らぬ間に六〇年一周の干支のサイクルに組み込まれ、中国の現世利益のシステムに絡みとられていた自分の生年に改めて驚いたりする。最後に北京科学研究院（つまり共産党の幹部養成学校）の中庭にある、マテオ・リッチほかの外国人墓地を訪れる。南懷仁、郎世寧など、ヨーロッパ側にも中国側にも著名な墓碑が、たいして広くもない場所に所せましと立ち並んでいる。文化大革命の際にこれらの遺跡を破壊から救ったという周恩来の碑文も囲い地の右手内側にある。玉を嵌め込んだ二頭の龍のからまる意匠を戴いた墓石は、皇帝直々の命による建立であることを告げていて、

中国側の視点からすれば、あくまでカトリック神父たちも中華帝国の支配下にあったと見なされていたことが忍ばれる。それにしても墓石のお好きな一行だ。

夕食は紫玉飯店。定刻に現れた欧州人はジャンルイひとり。わざわざひけどきのラッシュのなかを遠出してまでして来る価値もなさそうな、うらぶれた旅行者用大型食堂。北京大学の一行と一緒に入ってみると客は我々だけ。隣席は楽黨雲先生。ひっそりかえった王賓の代役を務めるつもりでもなかったのだが、どうしたわけかこの英語の達人たる楽夫人を横にしたとたん、席上唯一の日本人の口からも突如英語が怒涛のように奔流し始め、ほとんど一人でその場（といっても大きな円いテーブルひとつだけ）の会話の乾取を独占してしまう。何をしゃべったかとんと記憶にないが、おそらく昼間の会合で発言の機会がなかったための代償を脳髓が求めていたのと、ほかの大御所ヨーロッパ人たちの不在が心理的な抵抗を除去してくれたものもあるのだろう。なんだかえらく迫力だけはあったらしくて、その後北京の参加者からいろいろと話かけられるようになる。曰くお前さんみたいに話せる日本人はあ

まりいない。だいたいが内にもつていて話をする気がなさそうで、主張がなく、話しかけても逃げ腰だ。そのくせ背後で日本人同士なにやら画策しては一方的な提案を持ち出してきて、いざ会議の席ともなると、これが東京の意向であつて、我々現地担当には決定権がないので、これを追認いただきたい、といった高飛車な調子の「交渉」に終始する。などなど。さんざん彼らの「日本人観」を聞かされ、それがいいいちち図星であるだけに、なにやら暗澹たる気分にもなった。一同そそくさと食事を済ませると、あとはホテルに戻ってお休みなさい。

6/19

朝から会場を北京大学構内の純中国風貴賓室に変えて、内輪の研究会となる（こう

した内密な会合になったについては、やはり北京政府に対する政治的な遠慮があったそう。まずアラン・レイが記号学的見地から見た革命概念の検討、類型論を展開するに際しては湯一介の方法論を受けて、中国の革命思想は、過去を一度に否定する点ともに利用し、かつ引き伸ばそうとする点で、*révolutionnaire ni contre-révolutionnaire ni*

*reactionnaire*だ、などと軽口を交え、例によって明晰・肝要な発表である。これとの対比で、西欧の場合の特徴としては、司法、行政、立法の三権にまたがる変革、社会主義者の場合であれば、さらに社会経済的な変革、そして大衆というイデオロギーに支えられた、行動する少数者による、いままでの状態Ⅱ国家体制に対する反逆という三点を特徴として挙げる。最後に第三世界の場合の特徴として、国民主義的なバイアスと本源的的正統性護持の退行現象が随伴する点を指摘して、イスラームにおける「サウラ」の語源的な説明——家畜にさがりがついて暴れること——に言及した（こうした語源的な説明がそれ自体オリエンタリスティックなイスラーム蔑視として槍玉に上がっていることは、あとで個人的にご注進申し上げたのだが）。

つづく革命過程の分析がじつは白眉で、既存秩序破壊の反権力闘争がそれじたい権力闘争へと転倒してあらたなる秩序の貫徹を目指す（反動的な）運動へと変質し、そのなかで必須となる「革命のなかでの革命」が、場合に依じてトロツキー流の永久革命論や、西欧社会主義政権の刷新政策さらにはアラン・ブルーム流の「革命の終焉」とい

「壁なき大学」発足に向けて発言する
ウンベルト・エーコ（左）と楽黨雲。
（6月19日）



うアメリカ式虚構捏造に行き着く場合すらある、とする。結論としてアラン・レイは、すでに北京での開会式のおりに沈大力も指摘したように、理想化された革命モデル追従による変革の理想化がしばしば人間の尺度を越えた「馬用の薬」となっており、効きすぎのあまり暴走する傾向のあることを確認し、病气なき社会が定義からしてあり得ない以上、万能薬も存在しない、神がいないとする以上、この地上には人間と自然しかないのだから、という少々謎めいた結語を述べた。

つづきは、バリ大学に「ヴォルテルと中国」という主題で新博士号論文を提出した孟華 Meng Hua 女史が、一八世紀ヨーロッパで誤解された儒教の例をとり、歪曲の肯定的な局面を考察。中国語では女傑というか女闘士という感じの大演説が、フランス語での上品で見事だが手短な要約には十分には内容に踏み込めず、例の典礼論争などは復習どまりで、欧州勢は食い足らず。儒教の天の観念における仁、つまり人間と自然との関連において地上における天の秩序を説く思想が、かかる歪曲を通じてではあれ、キリスト教の神対自然の弁証法が危機にあった時代にヨーロッパに伝達された意義はおおきく、そ

れが革命思想の下敷きともなった、と主張するのだが、重要な論点だけに具体的な検討や裏付けが是非とも欲しかった（後で言えば、もちろん彼女は後藤未雄などの古典的研究はとくに存じではあったのだが）。

とりわけアラン・レイの発表でも易姓革命の思想に対する言及がなかったこともあって、せっかくの話題がいくつかとつかみ合えなかった。あとでレイに正すと、易姓革命は王朝の交替を正当化する星占術の説明原理だから、西欧の revolution とは範疇を異にするというのが、かれの返事だった。だが、両者が明治期の日本人によって同一視され、その訳語が厳復などを通じて（そうしな経緯は忘れられたまま）中国に採用されている点は、これまたひとつの誤訳——serendipity——かもしれないが、とまれ evolution の訳に「革命」が当てられたという事実そのものは、歴史的かつ翻訳史上、語彙学的事実としても政治思想史のうえでもけっして無視できないはずである。日本人の目からみればあまりに明白なこの誤解の相乗作用が、翻訳語彙の選択の擦れ違いゆえに気付かれることすらなく、西中双方の当事者からあまりにもあつさり見過ごされてしまったのには、むしろ痛烈

な奇異の念を抱かされた。

このあとプログラムは少々欲張り過ぎ。つい最近まで筑波大学で宮田登先生のの下にいた民俗学者、周星 Zhou Xing、文学理論の陳耀紅 Chen Yaohong 教授、それにコンピュータ工学の孫曉礼 Sun Xiaoli 夫人がづきづきに発言。お決まりの外交演説のほか、中国の伝統的なものを考古学的に掘り出そうとする態度に対するガウダーミを利用した反論、昨日のエーコを敷衍したライブニッツと中国の教學との先陣争いみたいな話（もちろん中国の優位を主張するのが眼

目）。中国語のワープロソフトの件などは、できればその場で実験して見せて欲しかったのだが、あとで個人的に質問してみると、あいにく孫夫人の英語はほとんど使いものにならず、議論は堂々巡り。

中国側が言いたいことだけを言い放つのでは議論にならず、沈黙を強いられた格好の欧州勢はややお冠。予定では会議の外で自由に討議が続くことになっていのだが、残念ながらそれに耐える外国語を操れる北京大学関係者の数があまりに少なく（どこかの極東の島国でも事情は似たようなものだろう）、両者あまり熱心に意見交換をする雰囲気でもない。午後は予定では孔子

廟、ラマ教の雍和宮などを中国側関係者と一緒に回る計画だったのだが、どうしても故宮を見たい、故宮なしの北京なんて、パリに行つてノートルダムを見ずにサン・トウスタシーシュを訪ねるようなものだ、などの幼稚な声が西洋側からあがり、見飽きたる中国勢は不参加。宛てがわれた友誼賓館に早々に涼みに行つてしまふ。

夕方から本日はフランス大使主催のカクテル。猛暑のなかをまたしても正装の苦行である。大使館中庭で、ほんの軽いスナックと飲み物を口にしなが、いろいろな雑談。今回は美学の藤守亮 Tetsu Shourei 教授や中国哲学の孫尚陽 Jun Shangyang 助手など北京大学の面々と、いろいろ将来の交流計画や夢を語ることができて、ひとりポツンと孤独に佇むという図にはならなかった。それでも公の場では一度も発言をしていない手前、新しい知人をつぎに作るというわけにも参らない。お互いに半数以上は知らない者同士という場面に日本人が居ると、おそらく経験からの類推がそうさせるのだろう、どうにも敬遠される。今夜帰国のフリオ・コロンボ夫妻とお別れの挨拶。外交官のお愛想にも情感が籠る。

*

夜は「壁のない大学」発足宣言の下準備で、湯一介、楽盛云夫妻の部屋にアラン・ル・ビション氏と同行で交渉のため（なぜか小生も）参上。こうした事情でアランも小生も夕食抜きとなる。アランはもう何日もともに食事を取っていない。湯教授があまり英会話をなさらないので、作業言語は法語、通訳には孟華夫人がおられる。外交官的な素振りにはまったくお見でないもの、交渉相手の内情が手に取るようにお見えになるらしい湯教授は、相手に無理な要求をすることなく、しかし実益はけつて見逃さぬじつに柔軟な妥協策を、悠揚せまらぬテンポで、しかしきわめて実務的につきつきと提案されていく。中山大学と北京大学、さらにはマカオ大学を巡る主導権争いの調整に頭を悩ましていたトランス・クルトゥーラ側のアラン・ル・ビション氏としては、まずは大助かりという局面である。ところが交渉を終えてホテルのバーに降りてみると、エーコ、アラン・レイ、アントワヌ・ダンシャンなどが待ち構えていて、こちらの雰囲気はかなり陰悪。ル・ビション氏の冒険的な独断専行気味の計画濫立と絶え間無い予定変更、かならずしも周囲に十分な情報流さぬまま、他人の口約束を楽天

的に信用して、自分に都合よく薔薇色の未来図を描いてしまい、あとで現実とのギャップが露呈すると前言撤回のうえ、最後には自分で責任を被ってしまふという行き当たりばつりの無節操さも、学会の規模が小さかった間はそれなりに機能してきた。だが今回のように野心的な企画となると、あまりに水漏れ事故が多発しすぎる。全員を満足させようとアランが画策すればするだけ、かえってだれ一人満足できなくなる、という悪循環。おまけに下手な失敗は複雑な国際関係のなかでは学会の命取りとなって構成員全員に跳ね返りかねぬ。そうした危惧が感情的な連れを伴って噴出してきた。

学会運営にはつきもののこうした混乱に巻き込まれることを最初から拒絶している聡明なるウンベルト・エーコは、有名人ならではの要請された学術顧問代表としての自分の職分を確認すると、それで問題なし、と席を立つたが、ル・ビション氏自身、自殺行為す前の個人ブレーの限界はよく心得ていて、内心今回の始末をふくら心長を降りたいのだ。王賓がまだ動けないので、打開策をふたりで協議するうち、明け方となり、またしても睡眠不足。

6/20

朝から討論のつづき。
アイデンティティと伝

統そして影響をめぐる議論。一番手は楽教授。すでに合衆国に招かれたおりでどこかで公発表すみの挨拶だが、影と響きの比較文学を李白、明恵上人それにボードレールの詩を枕に説くという趣向。観照対象との一体感に忘我の心境を託すものばかり。そのときのノートの記録によれば、次の第一のものが李白（月下独酌詩）、第二のものが明恵上人。だが結局ボードレールの同様の詩なるものの同定はその場では不能なまま。

花間一壺酒 独酌天相親
举杯邀明月 对影成三人
我歌月徘徊 我舞影零乱
醉时同交欢 醒后各分散
（以下略、途中省略あり）

心境清微物佛于
月充澤然相融與
（原典不明、訳語順不確か）

そのあと昨日と同様に孫尚陽 Sun Shang-yang 氏が徐光啓について、多彩な翻訳活動で知られる文学研究所の郭宏安 Guo

Hong-an がわかりやすい仏語を交えて閉じることと開くことの弁証について、美学の藤守亮 Teng Shou-yao が英語を交えて太極の理における上下、内外を逆転する可能性を文化交流モデルに応用しようという話、フランス文学専攻の羅氏 Lu De-gang がこれも明快なフランス語で reduction et transmission、raïson、transformation という二点から検討し、leve の変貌の要因たる litige のメカニズムを究めようとする翻訳論、それに昨日来通訳としても活躍の新華社の若い記者丁一凡 Ding Yi-fan が最近の中国対外商業事情から笑い話をいくつか（発音不明瞭でありよく聞き取れず）。以上五人に続いて当方にお鉢が回って来る（という事情で、この部分の記録が不備な点、ご容赦願いたい）。まず最初に、羅氏の取り上げた問題では、*ridiculous incomprehensible et compréhensible* といふあたりの注に注意する必要がある。フーコーの有名な『言葉と物』の序文にボルヘスからの借用で、中国の百科事典の話が出て来る。西欧語に訳すというそれらが一緒くたに配列されているのかまったく範疇概念が理解不可能な怪物の例があるわけだが、これは案外漢字にもどしてみれば、すべて魚偏か獸偏のつくもの

が画数順に集められていただけなのかもしれない。これは冗談だが、似たような擦れ違いが、実はこの会合で、哲学のタームの翻訳などを通じて再三にわたってそうと気付かれぬまま発生している。漢字のつくる語根によるネットワークと西欧哲学の用語が語源によってつくるネットワークはまったく別物であることを忘れると、通話は相互の思い込みという名の擦れ違いに終わる。こうした欠点を避けるには三点測量という手段がある。ひとつには中国と西欧の類似した事象が第三の文化（例えば日本）でどのように受容されたかを比較する視点。第二には西欧のある事象が中国と日本とでどのように異なる理解をされたかの比較である（その趣旨の論文を準備してきたのに結局発表の機会がなくなった腹いせ。さて第二に、翻訳について郭先生の触れられた、障害となる壁とかそれを突き破る穴とかという比喩は嫌いである。むしろ翻訳とは空気抵抗のようなものと考えべきではないか。つまり湯教授も指摘したとおり、翻訳である以上抵抗から自由にはないが、しかし抵抗があるからこそ翻訳も可能になるのであって、かりに抵抗がなくなれば、もはや翻訳による飛翔は不可能だろう。

第三にそれなら相互が相互についてより深い知識をもつことで誤解を回避できるか、ということとは限らない。丁さんが食事のマナーの話をしたので、そこから例をとると、中国人に招かれた日本人は残しては失礼と思つて出て来た皿を空けつづける。中国人はこのお客についてなら満足するのとか訝しがりつつも料理を継ぎ足すが、いつになっても次ぎの皿を給仕できず、やきもきする。そのうちに日本人は皿目で満腹になってしまい食事はここで頓挫してしまう。それでは両者が相手側のテーブル・マナーを承知していたとする。今度は日本人はもう満足したという意思表示のつもりで料理を残す。ところが中国人は日本人は皿を空っぽにするはずだ、と思つていつまでも次の皿に進めず待つことになる。ふたたびここで食事は先に進まなくなってしまう。これは笑い話ではなく実際それは頻繁に起こる事態なので、日本に留学する中国人たちの教科書にはこの件についてきちんと注意書きである。そのせいか最近では中国人たちが日本での留学生スピーチ大会でかならず一度は持ち出す文化誤解の例になってしまった。事ほど左様に、言葉のレヴェル以前の身体言語に関する誤解は、食

物の恨みに係わるから恐ろしい。昼食前に注意を喚起しておきたい。

こんな低レヴェルの冗談を言うのは気が引けたし、それが拍手喝采で迎えられたなどと書くのはなおさらおこがましいが、つまりは異文化理解についての対話という、なかなかこの水準を越えられないのが実情なのだ。司会のエーコ曰く、AからBへの翻訳においては共通のレフェランス（X）が必要だが、稲賀があげたフーコーの例は（X）が欠如して想像上のパラメーターとなる場合で、いずれにせよ（X）そのものの（*presence*）には接近不可能だ。だからこそ、そこから純粋な言語、ヴァルター・ベンヤミンの *Reinrede* の夢も紡がれる。だがはたしてこれがひとつの公準へと集約してゆくのか、それとも無限に発散してしまうのかは、数日前ドミニク・ティルが言ったように、にわかには判じがたい。ただ、*New connections* の考えに拠れば、*being at home* の状態は想定されて、この場合規則は遊戯の後に後知恵としてしか形成されないが、稲賀の食卓の例でも試行錯誤のうちに困難は徐々に解消するはずだ（エーコはその実際をお話しにして身振り手振りを交えて演じてみせた）。それは *optimal*（最適）ではあ

るまいが *good*（そんなに悪くはない）だろう。このエーコの結論にはアラン・レイが *optimal* じゃなくてエーコの説そのものが *optimal*（楽天的）だ、疲労が逆に退行現象 *regression* をもたすというの、情報理論のイロハだ、予定調和を目指すことこそ純粋言語の夢と同根の危険な欲望で、エーコはその点自己矛盾を犯している、とやんわり異を唱えたりもしたが、この救い難い議論も一応ここでお開きとなる。

午後はアダム・シャルルの天文台、天壇それに琉璃廠のウインドショッピング。天壇はもちろん観光客だらけだが、うかつなことにいままでその意味が分かっていなかった。昨日の故宮の太和殿、中和殿、保和殿は、（翻訳を試みればわかるとおり）その名前からしても、この世界に調和を齎すための祭り事、政治の舞台として、ほとんど創造主に匹敵する本源の直観（*intuitus originis*）つまり制定したことが現実と化する）の魔術の遂行された場所として設定され運営されていたわけだ。だが、それにも増してこの天壇では、圓丘、回音堂ともいわれる皇穹宇、さらには祈年殿が、まさにピタゴラス主義といつてもよい音階理論に則った音響装置までも駆使した精妙な象徴体系に

よって、天のマクロコスモスの調べと直に共鳴しうるミクロコスモスとして設定されている。この装置を利用して天の声聞き取ろうとし、また天に声を届けようとした、その狂おしいまでの人間の意志がここに結晶している。アダム・シャルルの天文台として、その目的においてはなんら経度はないだろう。

いくぶん *visionnaire* なところのあるアラン・ル・ビションはここを初めて訪れたとき、突然天上の音楽が聞こえてきたことを語ってくれた。そしてそれはかれがかつてヴェルサイユ（だったかルーヴルのピラミッドだったか、凡人たる当方は記憶が定かでない）で耳にした音楽だったというのだ。そしてその時かれはまだ両者に通底する共通の秘密（とは何だったか、もう忘れてる）を知ってはいなかった、という。ライブ

ニッツの夢はまんざらだの夢想ではなかったようである。その著「文化の往還」の天壇紀行を見ると、芳賀徹氏もまたそうとは知らずに同じ声を聞いた賢者のひとりだったとも言えるだろう。どうやらさちんと調律した楽器を設

えてささおけば、その楽器はおのずと天の楽曲を奏するものらしい。そしてそれは聞こえる人には自ずと聞こえてくるのだ。この不思議な話を聞いて思

い出されたのは、ひとつには大塚久雄が奏奏し内田義彦によって再話された、『茶の本』にみえる伯牙が琴を奏する逸話である（内田義彦「形の発見」）。楽器は鳴らそうとして鳴るものではない。だがその心を知る奏者が現れればおのずと鳴る。いまひとつはエティエンヌ・ブレヤニコラ・ルドゥーといった十八世紀の *salonné* な建築家たちが夢想した、その多くが最初からどうしたつて実現不可能な——巨大な宇宙建築のことであった。今日ならばおそらくダニ・カラヴァンのネゲブ祈念碑にその一例をみることも許されようそれらの精神的同族のなかに、北京の天壇もまた位置していたのだった。

6/21

長かった北京滞在も本日が最後。午前中には、

壁なき大学（L'Université sans Mur、無国界大学。ちなみにフランス語では万里の長城のことは *la Grande Muraille* という）を巡る会合。この朝なされた宣言については、別に公式な発表があるはずなので、ここでは触れないこととする（公式写真班のジャン・ルイが欠席したため、急遽その代役をおおせ付かり、そのため、この朝の記録を取る余裕が

なかった、という事情もある）。要はこれまで財団トランスクルトゥラが行なってきた文化間の相互理解に関するさまざまな試みを、アジアの諸大学におけるネットワークにより、さらに発展させるための五ヶ年計画の名称である。

ついで北京大学構内に合衆国の某企業からの献金をいれて開設されて間もない考古学博物館を見学。展示も一見の価値があるが、売店で販売している模倣作品も安価で高品質。せっかくの昼食をわずかに五分で切り上げて、午後は総仕上げの会合のため、八達嶺の万里の長城を目指す。バスでは途中孟華夫人から隣に座つてよいかと尋ねられ、思わず *oui bonneur, quelle bonneur* などと答えてしまう。どうも美女には弱いのだ。話を伺つてみるとなんと同時にバリーに留学していたわけで、突如話題はバリー時代の思い出に飛んでしまう。優等生でしかも中国の学生ゆえ生活費の捻出に苦労されたのがよく分かる。彼女も一昨年の東京での国際比較

文学会には出席、発表されていたが、あんなに大きな会合では勿論知り合いにもなれなかった。問題意識は共通だし、勉強知識の重なっている部分も多いから、情報交換も弾んで、あつというまに時間が過ぎる。ひとびとの体験

で、気分が悪いはずもないのだが、彼女のほうは連日の激務で偏頭痛が去らぬとか。世界中を飛び回る楽黛云夫人の秘書代わりともなれば、さぞ大変でしよう。わたしやそれ見越して東京から逃出したのでも。

さて、万里の長城へのお上りさんの観光旅行についてはもう省略するが、ほどよく雲が出て暑からず、まことに快適な天候だった。壁西側の不毛な切り立った山々に比べ東側は緑も豊かで霞みたなびくならでかな山並みの彼方に西日がゆつくりと傾いてゆく。一五時四〇分から招聘所にて、北京での会合の閉めに移る。作家、王蒙が、かつては中国を外の世界から分け隔てていた長城が、いまでは外国人を迎え入れる取つて置きの施設となったなど、どれからかといえは軽妙な談話を述べたのに対し、ル・ゴフ教授がいかにフランスの古き良き時代を彷彿とさせる（つまり時には滑稽なまでの）*brutale équilibre* を披露する。「イスラームの都市性」についての莫大の研究のある日本から見ると、イスラーム都市への考察の欠如が気にはなったが、中世都市の壁に閉鎖の象徴というよりはむしろ内外の交通のための特制的な場所を見ようとするル・ゴフは、検閲と

して機能する壁を糾弾し、とりわけ言語が伝達の手段となると同時に障害ともなりうることを(湯一介教授の「非開放、非閉鎖」でなくむしろ「開放かつ閉鎖」なのだといった冗談を交えて)確認し、そうした困難の一覧表(これはエーコの提言)を作り、この一覧表という壁をつき崩そうと訴えた。

「聖書の記述によれば、イエリコの城壁のまわりを七度巡ってトランペットを吹くと壁が崩れたという。今日われわれはこの長城にたつてひとつのトランペットを吹き鳴らそう。それに気づくのは、文化を跨いだ新たなシンフォニー symphonie transcinale であるだろう」とル・ゴフが格調高く演説を終わったところで、すかさず、司会のエーコが、「トランペットじゃないけど、今から音楽つきのアトラクションがあるぞう」というので、一同大笑い。北京大学一年生による、また少々幼い京劇の音楽や、その先生ご披露のこれは見事な舞踊。最後には、ついに女王様の地位を獲得した孟華が強権発動して、エーコはじめ全員にダンスを強制し、大騒ぎのなかでようやく幕。帰りのバスはカラオケで盛り上がる(そのレパートリーはロシア民謡から一気に「南天群星」に跳んでしまい、その間

のピートルズあたりの時代がごっそりと抜け落ちているのも、中国のおかれた現代史の有り様を如実に反映している。

夕刻遅く北京にもどり、ホテルの名池に面した屋外酒店 *Golden Week* にてビュッフェ形式の別れの宴。今朝帰国の途についたはずのアラン・レイは出迎えてくれるので、どうしたのと尋ねると、予約しておいた飛行機便が「没有」だった由。これで平然としているところがかれの大人たる所以。パーティーは成り行きに任せていると結局国籍別に座席が決まってしまう、自然な交流なるものの難しさを改めて感じさせられる。湯一介、樂黛雲夫妻は翌朝にはスタンフォード大学へご出発。ほかの中国人の面々も北京の風習にしたがって早々に辞去してしまい、まだまだ続くものと思っていたヨーロッパ勢はやや拍子はずれ(なにしろ五百周年で招かれたポロニア大学の宴など、ウンベルトの笑撃響きわたる九天井の亭で午前二時までつき合わされて、ほとほと呆れかえつたのも、今や懐かしい)。

翌日午後にはマカオにて次ぎの会議の公式開会式。エーコ夫妻、アラン・ル・ビションおよびリソン・トロサナ夫妻だけはそれに臨席しないとマカオ

側のメンツをつぶすことになる。というわけで、翌朝の出発は急遽二グループに分かれることとなり、これでまたしても大混乱。というのも、第一グループの航空券はポルトガル大使館の手配だが、その分は従って同行の中国旅行社の管轄ではないから面倒を見られないなどの事務的な縄張りの問題が、またぞろ新たな「壁」として立ちちはだかってきたからだ。当方もこのマカオの会合でもう一席、懸案の発表をする予定だったが、これもトロサナ夫人を招かないと失礼と考える先方の都合と折り合いがつかず、結局中止と決定。義理がたいカルメロが本気で残念がってくれる。

6/22

第一グループは八時三十分離陸とのことで早くも午前五時には出発。第二グループは一時出発。離陸一四時四十分。香港空港に到着するとちゃんと出迎えがあり、その後の移動はまことに円滑にすすむ。もともとブラジル暮らしの経験あるジャンルイが空港の出口でポルトガル語の看板 *OS EQUIVOCOS NA PROCURA DO UNIVERSAL-COLOQUIO INTERNACIONAL DE MACAU* をもつ係

の(たいへん実務的だが知らなければまるで女子大生という雰囲気)の女の子を目ざとくみつけたから救われた話。あわれ先行の第一グループはうっかりこれを見落としたりばかりに悲惨なことになる。

一九時にはジェット・フォイル噴射船に乗り込み五〇分で澳門到着。一九時五十分には *New World Empaque* 新世界帝濠なる、名前だけはいかめしいホテルに一行様ご到着。完璧な英語を操る澳門基金のスタッフがきばきとチュック・インを済ませてくれる。まるで王侯貴族の旅行。ところが玄関に現れたエーコが問われるまでもなく、ちよっと聞いてよといった風に語ったところによると、第一グループは北京空港に行くことと航空券が予約確認されておらず、まず一悶着。香港に着けば着いたで、迎えもなく(つまり見落としたりわけで、これが明暗を分けたのだが、とにかく自分たちでやりくりしてマカオにたどり着き、ホテルに到るも、ホテル側は何方様ですか、予約ありませんよ、にまた仰天。どうやら澳門基金係員がちょうど会議場に出払っていたところに到着あそばしたらしい。それやこれやで、予定された開会式は開始時刻遅延のうえ発表の時間も大幅に切り詰めて、

たった今終わったところ、という。つまり第二グループのわれわれの到着に合わせたように、まさに宴会が始まるうとしていたところだったのだ。

格式にうるさいマカオのこと。言われたとおり暑苦しい正装をしてホテル二階の *Emperor Court* なるレストランに降りてみると、数日ぶりで中山大学の面々の懐かしい顔が見える。陸路ひと足先に到着して、本日のオープニングに参加していたのだ。ふだんは絶対ネクタイなどしない蔡先生や姜先生までさちっとした身なりが決まっっていて、苦笑する。なにしろマカオ政庁じきじきのお招きである。奥方同伴の王賓は北京の疲れもどこへやら、縦横に活躍して座を取り仕切っている。指定された席についてみると、隣は李淑儀・ステラさんという若い方が落ち着いた感じの女性。肩書は公共行政培訓中心高級技術員というお役所勤めなのだが、これが広東語にポルトガル語はもちろん、普通話中国語、英語、フランス語まで完璧な同時通訳。マカオという土地の高級官吏の国際性にただ驚嘆するばかり。それが幻想にたかないことにも早々悟られるのだが。

反対隣には中山大学歴史系の章文欽副教授、同じく中山大学で旧知の、だ

がいつのまにか名刺には外事處處長の肩書とならんで港澳台工作辦公室主任なる肩書までついた黎國榮副教授。このおふたりの英語は、申し訳ないけれどもほぼ役に立たない。だが、それでもマカオでは心配ないわけだ。なにしろ完璧な通訳が何人もこの会合のために借りだされているのだから。かえって広東出身でない劉文立がステラさんとフランス語でおしゃべりする様子がなんとも珍妙だが、本人はいたって真面目。日本ではちよっとお目にかかれぬ構図だ。料理も広州や北京には負けらぬ。そこはポルトガル流、深夜にいたるまで、これでもか、これでもか、と食べる暇もない回転で、つぎつぎと新しい皿が運び込まれる。子豚の丸焼きなど、見せびらかせておいて、食べるのは皮だけだ。もうここまでくれば文化も爛熟すね。

6/23

午前中はマカオの歴史探訪。案内は *Pete Teixeira*。白髪、白衣の神父。地元名士らしく尊敬を集めている歴史家とこの

とおだが、これがおそろしく権威主義的なお爺さん。自分たちも結構えらいつもりでヨーロッパ勢一同苦笑しながら

も、この時ばかりは良い小学生を演じ、一生懸命聞いてあげ、質問をしてあげ、ノートを取るふりをして、しっかりと付き合ひ。結局何をみたのかよくわからぬまま午前中あちこちを引き回される。汗も滴る湿度百パーセントの中を再び正装して、今度は高台にあるマカオ政庁を表慶訪問。冷房したバスから道路に降りたつと、眼鏡が一瞬に曇つてもうなにも見えない。眼鏡拭きふき、ひとりひとりガヴァナーと握手をして入館。当方が日本人と見るや、姉妹縁組の薩摩、種が鳥、堺からいまして戻つたばかりとのお話し。そりゃあポルトガルが日本の歴史を変えたのですからね。といったやり取り。アペリティフに始まって、真つ昼間から酒つきの豪勢な立食パーティーの昼食。午後には発表のあるエーコはここでもインタヴューに捕まり、食事をする暇もない。有名人は楽ではないのだ。有名でない我々は、余裕しやくしやく「エーコ尻目に美食貪ほる」。

すっかり出来上がり、本来ならシエスタのはずが、しっかりと公開講演会。会場は工科大学の豪華なアンフィ・テアートル。各席に同時通訳設備がある。新聞記者からテレビまでさかんにフラッシュを焚くなかで、まず、今回の旅

程を復習してその意義を述べる、ウンベルトの気楽で愉快なおしゃべり。当方はアルコールが回って眠たいあまり聞き漏らしたところ、これが終わったら、聴衆のほとんどがいつせいに立ち上がり、ご帰還あそばす。どうしてウンベルトをトリにしないのだ、またアランがバカなことをして、とは隣席の従兄弟ドミニクの弁。もつともそのあとウンベルトはテレビ演出が入っていたのだから、調整も無理。

若干白けた雰囲気なの、休憩を取って気分一新。中国南部における外国の宗教と銘うって、リソン・トロサナ教授司会のもと、北京の孫尚揚君と中山大学章文欽さんの発表。孫君の発音はどうも多少方言が入っているらしく、通訳のステラ李淑儀さんときれとぎれだったが、途中からこれはわからないと立ち往生を公言。ドミニクも何いつとのかわからん、とおつしやる。対する章さんは英語こそ不自由なもの、中国語論文は明快で、とりわけ一七世紀士大夫階級にとっては、天主教の処女懐胎が納得できず、この点でキリスト教が儒教とは根底的に折り合わなかつたことなどが指摘された。つづ

くイエズス会の *Pere Vieira Pires* は *Matteo Ricci* と *Joao Rodrigues* 龍華民を扱って

いうので、期待していたのだが、輪廻転生を巡っての両者の意見の対立なども論じていたに限りかわらず、通訳を介して理解した限り、文化摩擦に関する問題意識があまりに希薄で、既に記したようにまったく期待倒れ。討論会でも質問が出ず、王賓が一方向的に長々と広東語で発言するが、これまた例によって通訳不可能。いやはや入れ物ばかり立派で儀式じみ、中身が空虚ではなんとも空しい。

公称では夜八時からカジノでも有名なBos Vegasホテルでの、ガヴァナー主宰の夕食会。招待状には「澳門文化司署謹邀閣下出席」なんてあって、突然えらくなったような錯覚に捕らわれる。会場についてみると、マガホニー内装のそのあまりの豪華さと広さにドミニクとふたりで恐れをなし、隅っこで小さくふたっていることにした。またしても困った日本人の性癖が発症だが、形式的な公式行事ばかりで内実のある議論ができず、あらたな研究者と知人になれる雰囲気もなく、さすがにうんざりしてきた。そろそろ引け時だ。延々とつづく挨拶の演説と、それを即興で難なく堂々とこなすお歴下を見て、ああやっぱこういうのが日本人には無理だな、などと埒もないことを考える。

ようやく食事にありつけたのは、もう九時半も回ったところだったろうか。外国からお客があるたびにこんな応接ではさぞ大変なことだろう。

深夜までカジノ見物に現を抜かすラテン系の連中をあとに、王賓、アントワヌと徒歩でホテルに戻る。おとしの中山大学での国際学会の報告書、『獅在華夏——文化双向認識的策略問題』（中山大學出版社）がようやく刷り上がり、王賓が何冊が持参してくれていたのだ。アラン・ル・ビシオンは阿訇・熱・比松、アラン・レイは阿訇・雷、ダンシヤンは唐尚、トロサナさんは托羅薩那となっていて、漢字は読めるアントワヌもどれが自分の論文かわからない。名前当ての遊びにしばらく興じたあと、さすがに草臥れて、各々自分の部屋に引き上げる。

6/24

今日は朝からレガッタだ。「澳門龍舟競渡大賽」を貴賓席から見物、という趣向。観覧席は昨日のガヴァナー公邸すぐ下の海岸の水面上に、竹を組み合わせて作った特設会場。サン・ミゲル・ビールも無料で飲み放題とあって、朝っぱらからこの酩酊。八時から選抜開始。長崎や

香港でやっていると同様の競技。おそらく観光対策に始めたのだろう。第一組には鹿児島から出場の日本隊もあったが、コースを外れたとかで失格。またまたトロサナ夫人が本気で残念がってくださった。どうもマカオ地元組は元気がなく、外国チームが優勢。そのうちに快晴だった空が急に掻き曇り、あたり一面大雷雨になって、レースも一時中止。だが一年中天気予報といえは「晴れ時々曇り一時雨」というお土地柄。現地の人たちはもう慣れたもの。三〇分もするとまたもとの晴天が戻って来る。それともいかにもマカオらしい。たぶん全員女性のはずのカナダ隊が、タイムでは二分一九秒四三という、ほかを一〇秒近く離す抜群の成績で一位を維持している——というところで、「特別来賓」の我々は九時三〇分過ぎに退席。

本日は例の白髭おじさんの司会で、マカオの文化史に関する発表があった。David Bego Bego夫人がマカオという極小の土地に共存する複合文化の分析、Teresa O'Shea夫人がマカオの文化・政治史の復習。内容はこれといって新鮮でも刺激的でもないが、通訳はいずれも昨日の不調に懲りたのか最優秀の人らしく、そのよどみな技術には脱

帽した。いやもつとはつきり言う、儀礼的で教科書的なベーパーの通訳のために、わざわざ広東語、英語、フランス語の同時通訳を投入するのは、あまりに才能の無駄遣い、ちよつと犯罪的にさえ思われる。文化交流が行政の根幹となるマカオならばこそ逆説的な倒錯である。

最後にTeresa AlvesとJorge Floresによる海の道の交易をめぐる報告も予定されていたが、当方はここで制限時間。飛行機の出発時刻から逆算して、もうこれで退席しないと、公務出張書類の背任に問われる。こっそり抜け出したつもりが、やっぱ見つかって、いろいろ事後のことをアラン・ル・ビシオンと詰め、ジャンルイ・ランボーと打ち合わせが、観光局一の美人の切れ者おねえさんが、もう時間切れ、とあいだに強引に分け入って幕。ほどなくジェット・foilの人となる。最初から予定がわかっていれば、どうせ週末なのだから、日程の調整もできたのだが、そこは親方日の丸、公務出張となれば、日程の変更はおおごとで、事務のひとたちの手間を考えれば、とてもおいそれとは申し出られない。午後には王賓の一世一代の講演も予定されていて、もちろん後ろ髪を引かれる思いだが、

致し方ない。

*

こうして三週間におよぶ、なんとも形容しがたいむちゃくちゃな講演旅行は、いささかあつてなく幕切れとなった。いまこの平凡のうえない下手な報告を書き終わって、はたして充実した日々だったのか否かと問い直す。ひとつ明らかなこと。それはこうした欧亜文化交流にあつてもっと多くの日本人の積極的な参加者が不可欠だ、ということだろう。集団の力の大きさと、それを束ねることのむづかしさと、そして個人の力の限界というものを、非日常な環境のなかで悟られた。経験不足を切実に感じたのみで、とるに足らぬ貢献しかなしえなかつた。今は充実感よりはむしろ疲労感に見舞われている。そしてこの大旅行後の財団の経済状態の悪化に危惧しながら何らの手段も講じられぬ歯痒さを感じている。「壁なき大学」ははたして順調に発展するのか、それとも文字どおり壁もないままに崩壊してしまうのか、現在のところまだまったく予断を許さないからである。

(一九九三年七月)

おわりに

一方で高温多湿の香港や雷雨のマカオでのネクタイ着用のお呼ばれ。他方一転して西域では湿度二〇パーセント、気温四〇度を越える砂漠の史跡見学と、移動だけでもかなりの強行軍。それに加えて、毎日のように各地で公式のレセプションを消化し、必要に応じて通訳を務め、自分の発表の準備や他の発表者との打ち合わせ、議長役をこなさねばならなかつた。けつして交通事情も通信事情も円滑とは行かぬ辺地の旅行先である。次々と変更される計画の調整や、予定案内の通知、豪雨で鉄道線路が流されたといった思わぬ事故の処理にも追われ、しかし表面上は和やかに民間外交官を振る舞い続けるのは、正直言つてそれだけでもおそろしくシンドイ話であつた。

加えてご覧のとおり事務サイドの機構がいかに脆弱だった。慣れぬ土地で、身動きひとつままならぬくせに、ともすれば個人行動で身勝手な主張を繰り返しては問題を起こす、ブライドのお高い外国人たちを有めたりすかしたりしながら、ホテルの変更やら会議室の使用許可といった外交交渉(ウルムチの場合にそうだったように、中国人主催——という名目——の会合と外国

人主催の会合では、使用料が一桁は違うのだ)から、途中参加者の航空券の手配や送迎、その他雑用案件処理に至るまで、さまざまな心理的葛藤の真っ

只中をひとり奔走し、終始超人的な活躍を見せていた中山大学の王賢も、さすがに北京到着後にダウンした。その代役も暫く当方にお鉢が回つてきた。こうなると時差七時間のヨーロッパとの電話連絡の都合もあつて、夜もおちおち満足に睡眠を取る暇がない。そのため後半部とりわけ記録が不完全となつたことをお詫びしたが、実際の状況ではきちんと記録を取ることなど、もはや物理的にも不可能に近かつた。あらためて人類学者のフィールドでの苦勞が思いやられたことだ。

それでもなんとかマカオでのお開きに過ぎ着けたのは、もっぱら会長アラン・ル・ビション氏のいつもながらの破天荒かつ無計画な自己犠牲精神のお陰である。財団の顔であり学術委員長(という名譽職)にあるウンベルト・エーコなどは、北京ではふと気付くと同時にふたつの場所で講演をする予定が入つていたりもしたのだが、旅行の最後のマカオでの晩餐会で、いつもながらの茶目つけに本心を覗かせながら、曰く、「この旅行の成功はもう奇跡とし

かえない。もう一度こんな無茶をすれば、財団はかならずクレーダーに見舞われることだろう」。

*

こんなお歴々と三週間朝から晩まで緊張感に満ちた時間をもつ機会は、したがつてもう二度とないだろう。忘れないうちに日記を補いながら、せめてその旅程だけは忠実に復元して残しておきたい、出版は無理としても。などと帰国後早々に考えたのが、執事そのものの執筆の動機であつた。今回、執筆後まる二年を経過して、まことに幸にも発表の機会を得た。だがあらためて読み直してみると、舞台裏の事情にかかわる不意な個人的感想が随所に顔を出していて、鼻につく。執筆者個人にかかわる記述は極力削除すべく試みたが、話者を消去すとかえつて虚構じみて来て、もはや推敲不可能な箇所も少なくなかつた。とりわけその場その場で質疑応答や即興の発言を要求されることが多かつたため、改めてノートをひっくり返してみても、発言の準備のメモ作りに追われていたらしく、周囲の発言を客観的に記録することが自分でも意外なほどに不徹底にしかできていない。せつちでひとりよりがちな筆致、未熟な旅行者ゆえの表面的な観察、無

理に背伸びをした気ぜわな台詞。あるいは読者の不快感を誘いかねぬそうした箇所へのご批判は甘んじてお受けしたい。

また国際舞台で劣勢コンプレックスを露呈した惨めな日本人青二才の偽らぬ姿がそこに浮かぶようなら、これは恥を忍んで晒すこととする。もとより今回のような企画は実現にあたってさまざまな困難にぶつかるが、えてしてそうした舞台裏の混乱には言及しないのが「身嗜み」とされる。そのためかえって運営の実態は知られぬままで、ノウ・ハウとしても蓄積されることなく、喉元過ぎればやがて忘却される。ためにこゝ国際的な催しとなると、事務方はとかく初歩的な不手際をそのつど繰り返すはめになる一方で、おエライさんたちは、そうした縁の下苦勞にはまったく無頓着、結果として外国からの参加者の不興を買う、という日本的な構図ができあがる。そうした失態にあえて言及することで、もって他山の石となれば望外、本稿はそのための捨て石ではない。なお、本来この報告を補うべき正式の学術報告書は、諸般の事情から現在のところまだ出版に至っていない。また多方面にわたる文化摩擦を主題とするがゆえの不適切な表

現や不正確な内容も多々あるうかと懼れている。訂正すべき点については、識者からのご意見ご叱正を賜れば幸に存じます。（平成七年七月七日加筆）

付記

参加者氏名の中国名の発音については、当事者による報告に従ったピンイン表記をほどこした。四声については連音による変化があるが、一応辞書の標記を記してある。仏語のアクサンを含め、やや不統一が見苦しいが、外国人である彼／女らへも提示する義務があるための処置としてご了解いただければ幸である。

ars | literary magazine of tohoku university of art and design 1995 3

東北芸術工科大学文藝 第3号

発行日	1995年9月1日	
企画・発行	ars編集委員会	
	田島正樹 [代表]	
	谷川昌幸	
	手嶋兼輔	
	上田高弘	
	990 山形市上桜田200番地	
	東北芸術工科大学内	
	tel. 0236-27-2000 (代)	
第3号編集実務	上田高弘	
学生スタッフ	佐藤晶子	柴崎由美子
	高橋汀	高橋雪枝
	高橋由紀枝	千田由花
	仲島真一	町田洋子
デザイン/レイアウト	加藤芳彦	
印刷・製本	大風印刷	

© 1995

特別定価＝1,250円 (本体＝1,214円)